長谷川端蔵『源氏物語』宗　具　筆「蛍」
石井了倶筆「常夏」
北畠殿　筆「篝火」
能　舜　筆「野分」
水無瀬中将殿筆「藤袴」

長谷川　端（文責）　駒田貴子
村井俊司

解　題

一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』『源氏物語秘訣』[1]各一冊の中の宗具筆「蛍」、石井了倶筆「常夏」、北畠殿筆「篝火」、能舜筆「野分」、水無瀬中将殿筆「藤袴」である。

「蛍」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、幹や枝を朱で、金銀で花房を描いた二本の藤の下絵に「ほたる」と墨書きする。全丁数は二十五丁、墨付二十二丁、遊紙は前一丁、後二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は二～二十四字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「常夏」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、上部から下部に金銀で葉を朱で枝や幹を描いた山の景の下絵に、「とこなつ」と墨書きする。全丁数は二十七丁、墨付二十五丁、遊紙前後各一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は五～二十四字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「篝火」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央部に三つの篝火と思われる構図の下絵に「かゝり火」と墨書きする。全丁数は六丁、墨付五丁、遊紙後一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は五～

二十字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「野分」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、多くの細い線にて野の草叢を描いた下絵に、「野わき」と墨書きする。全丁数は二十二丁、墨付二十一丁、遊紙後一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は二〜二十三字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「藤袴」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、上部と中央部より少し下の二箇所に野の花を配し、下部には細い線にて草々を描いた下絵に、「ふちはかま」と墨書きする。全丁数は十七丁、墨付十五丁、遊紙前後各一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は五〜二十六字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺[2]」、玄陳筆「帚木[3]」「関屋[4]」、玄的筆「空蝉[5]」、岡本主水筆「夕顔[6]」「若紫[7]」「賢木[8]」「明石[9]」「澪標[10]」「蓬生[11]」「薄雲[12]」「少女[13]」「玉鬘[14]」「橋姫[15]」「手習[16]」、石井了倶筆「末摘花[17]」、西山宗因筆「紅葉賀[18]」「宿木[19]」、左馬助筆「花宴[20]」、東寺観智院筆「葵[21]」、北左平次行生筆「花散里[22]」、大鳥居信岩筆「須磨[23]」、宗琢筆「絵合[24]」、玄仍息女筆「松風[25]」、伴与九郎紀金筆「朝顔[26]」、昌倪筆「初音[27]」、八幡田中殿筆「胡蝶[28]」は既に解題を付し翻刻した。

二、宗具

『狭衣物語下紐』に宗具本と呼ばれる写本がある。押小路家旧蔵で、現在、東京大学史料編纂所が所蔵する。

その奥書には、

右抄、法眼（紹巴）述作之時分、相伝也□此物語義理之濫觴歟、尤可仰可信、後年奥書与嫡子者也、慶長己亥林鍾中旬　宗具

と記されており、宗具が嫡子に残すために書写した本であるとわかる。また、ここにある「慶長己亥林鍾中旬」は、慶長四年（一五九九）六月中旬であり、『狭衣物語下紐』を著した紹巴が存命中の年号で、この写本を書写した宗具が、紹巴と同時代人であるとわかる。それは、紹巴が出座した幾つかの連歌会に宗具も名を連ねている点からも首肯できる。

このように、連衆として紹巴と一座している宗具と、『狭衣物語下紐』の書写者の宗具は同一人物とした上で、宗具という人物の特定については、上野英子氏[29]と川崎佐知子氏[30]に異なる見解が示されている。上野氏は、

宗具は儒医として加藤清正に仕えた江村専斎（永禄八年～寛文四年）の号。和歌をよくし、細川幽斎や木下長嘯子とも親交があったという。

と述べ、川崎氏は、

奈良連歌師宗具を、加藤清正に仕えた江村専斎（諱宗具）と同一人物とする説がある。活躍時期はほぼ重なるが、（中略）宗具の奈良での軌跡を勘案すれば、同名の別人物ととるべきだろうか。

というように、宗具に江村専斎を当てるかどうかで意見がわかれる。川崎氏はまた宗具について「活動の実態は未分明」とも記し、木藤才蔵氏[31]が、

明翰抄に興福寺と注記のある宗具も、天正十二年十月十二日に、順慶追善法文連歌を張行している竹田宗具と同一人かどうかは問題である。

と述べるように、宗具という人物の特定には、問題があるといえる。この点を踏まえて、川崎氏や木藤氏の引用文にある『明翰抄』[32]『顕伝明名録』[33]などの史料や連歌会の記録等を具体的に掲げて、蛍巻の書写者である宗具について考えてみたい。

連歌師としての宗具という名前は、先ず『明翰抄』第四十二「奈良連歌師」の中に見られる。

宗具　興福寺成林坊

これと同じ記載は『顕伝明名録』下にもあり、そこには、同名のもう一人の人物も記している。

宗具　興福寺成林坊（波）[34]

――　一乗院坊官

二人目の宗具の注記にある「一乗院」は興福寺の子院である。このように『顕伝明名録』には、宗具として興福寺に関係する二人の人物を載せる。

また、『近世畸人伝』[35]「江村専斎」には、

専斎は江村氏、諱宗具、倚松庵と号せるは、その庭に古松拾余株ありける故なり。祖、栄基は備前三ツ石の城主にして、落城の後京に登り、宗具に及ぶまで、新在家といふ街に住り。父既在は和歌連歌を好み、殊に聞香の伎に名あり。宗具初て学業にこゝろざし、かねて医を学ぶ。始加藤肥後侯（清正朝臣也。）に仕へ、のち森美作侯に仕ふ。されども身は京に住り。寿百歳をたもちければ、後水尾上皇仙洞に召て、修養の法を勅問ありしに、奏すらく、平生唯一の些の字を持す。食を喫も些、食欲を節にするも亦些、養生もまた些、此外に別の術なしと。帝大に感じ思召て、鳩杖、銀、絹、茶、酒などをさへ下し賜しとかや。（此一条は東涯の盍簪録に出。）その年の九月、彼庭の松のもとに、松覃数茎を生ず。奇異のことなりと人もてはやしぬ。

寛文四年、百歳に充る元日に口号の詩歌あり。

もゝとせも猶あきたらず行末をおもふこゝろぞ物笑ひなる

といへるが、中にはまさりたらんとぞ。此翁の話を書し老人雑話といへるあり。おもしろき昔がたりなり。

と記され「諱宗具」という記載がある。専斎の生涯は「寛文四年、百歳」とあり、永禄八年（一五六五）から、寛文四年（一六六四）九月二十六日とわかる。没年の月日は、『京都名家墳墓録』[36]第二編に、

江村専斎、宗具又以倚／松名菴、寛文甲辰九月／二十六日卒壽一百

という京都岡崎の善正寺にある墓碑による。ここにある「宗具」は「宗具」の誤記である。

ここまで、宗具に関する四つの史料を掲げた。そこからは、

① 興福寺成林坊　『明翰抄』『顕伝明名録』

② 一乗院坊官　『顕伝明名録』

③ 江村専斎　『近世畸人伝』『京都名家墳墓録』

三人の宗具が浮かび上がった。①と②の人物は『顕伝明名録』が併記している点から、言うまでもなく別人であるが、③の江村専斎については、宗具本の書写者として①と同一人物とするという見解を、上野氏は示しているが、京都と奈良という居所の違いや、専斎について記した『近世畸人伝』や、後に触れるが専斎の回顧談でもある『老人雑話』[37]に奈良に関する記述がない点から川崎氏と同様、別人と考えておきたい。

ここまで宗具の伝記に関する史料などを列記したが、それに加えて、次に連歌会に出座している宗具を見てみたい。『連歌総目録』[38]によると宗具が連衆となっている連歌会は二十一あり、年月日と連衆となっている人物を先ず掲げておきたい。網かけになっている人物は、奈良の連歌関係者である。

① 天正　九年十二月　一日　紹巴・和忠・心前・覚祐・玄桂・祐範・円専・宗杜・宗具・有俊・為政・清政・重朝

② 天正　十年十二月　六日　昌叱・和忠・紹巴・覚祐・心前・松（豊大閣）・江三位・慶尊・祐範・有俊・宗具・為政・於次

③ 天正十二年　十月　十二日　紹巴・昌叱・心前・宗具・英怙・紹与・一利・正順・全底・紹清・能札・道為・宗知・玄仍

④ 文禄　五年　一月　十六日　菊・祐範朝臣・楊・宗仙・紹九・宗具・永春・東林院僧正・覚情上人・重弘・元知・寿閑・能成

⑤ 慶長　三年　七月二十一日　義光・景敏・昌叱・友益・能札・光高・竺依・喜吽・久安・了以・宗具・能舜・滋和・能伯

⑥ 慶長　三年　八月　十四日　紹巴・宗治・玄仍・紹九・景敏・宗具・玄佐・玄仲・為正・重弘・慶純・行弘・玄実

⑦ 慶長　四年　九月　十八日　紹巴法眼・宗具・菊・玄仍・松林院僧都・祐範朝臣・覚情上人・元知・有俊・宗治・玄佐・重弘・行弘・幸治

⑧ 慶長　五年　八月　十一日　友貞・宗具・了味・底相・玄与・了倶・英知・実右・玄春・清杲・景乗・林□・玄仲・紹巴・玄仍・令・能円

⑨ 慶長　五年十一月　十一日　林□・了味・竺依・宗具・能円・英知・了倶・底相・玄与・友直・清杲・令・

⑩ 慶長　五年十二月二十三日
玄仍・友省・紹巴・実右
紹巴・他阿上人・教山上人・果空上人・昌叱・玄仍・昌琢・友益・玄仲・慶純・梅松・助慶・宗具・実右

⑪ 慶長　六年　二月　三日
楊・紹意・祐範・宗具・永俊・元知・為正・玄左・宗治・成政

⑫ 慶長　九年　四月二十四日
昌茂・昌琢・生・玄仍・喬・禅高・芳・玄仲・紹景・宗具・貞繁・景次・玄常

⑬ 慶長十二年　六月　十二日
紹意・貞次・楊・祐範朝臣・松林院法印・宗具・重・元知・永春・清玄

⑭ 慶長十五年　八月二十四日
英滋・宗通・英知・禅昌・能札・宗順・喬・芳・了俱・宗先・宗具・慶純・玄岑・玄陳・既在・元通・昌□・昌琢・宣滋

⑮ 慶長十六年十一月
親政・来祐・宗吟・宗具・宗伝・宗純・宗徳・三次

⑯ 寛永　六年　二月二十二日
昌琢・正方（加藤右馬殿）・玄仲・道白（天野佐左衛門）・宗具・能柏・能泉・賞白・吉真・能喜・昌悦・犬公

⑰ 寛永　六年閏二月　二日
玄仲・正方・昌琢・頼立・昌俊（佐川喜六）・宗具・賞白・能柏・昌悦・吉真・道哲・犬公

⑱ 年月日不明
昌叱・宗具・紹巴・松（松林院殿）・覚祐・心前・江三位・兼如・祐範・慶尊・宗治・円専・有俊・和忠・宗慶・定直

⑲ 年月日不明
宗仙・紹九・宗具

⑳ 年月日不明
菊・祐範朝臣・宗仙・紹九・宗具・永春・東林院僧正・覚情上人・重弘・元知・寿閑・能成

㉑　年月日不明　　楊・覚祐・宗具・祐範・正珠

この連歌会を見て、次の二点に留意しておきたい。先ず、概観すると網かけになっている奈良連歌関係者と宗具の同座が、年代の早い時期の連歌会と年月日不明の連歌会に多いとわかる。この奈良の連歌関係者の多くは、『明翰抄』が「奈良連歌師」として列挙する人々であり、前掲のように宗具もその中に「興福寺成林坊」と記されていた。そこで一つ目として、宗具の連歌活動は、奈良の連歌関係者の中でなされている状況が如実にわかる点を捉えておきたい。

それに関連するが、これらの連歌会で宗具と同座した回数の最も多い連衆として、奈良連歌関係者の祐範がいる。宗具との同座の回数を三回以下は省略して、多い順に並べれば次のようになっている。

九回　紹巴・祐範
七回　玄仍・昌琢（昌琢として五回、景敏として二回）
六回　玄仲
五回　元知・昌叱
四回　覚祐・重弘・紹九・心前・有俊・楊（一乗院尊敬法親王）

紹巴、玄仍、昌琢、玄仲、昌叱と里村一族との同座が多いとわかるが、それ以外では、『明翰抄』「奈良連歌師」の中に、「祐範　若宮社家」と名前が見られる祐範との九回の同座が看過できない。祐範は「若宮社家」とあるように、春日社の神官で、島津忠夫氏[39]によると、生没年未詳で永禄から慶長（一五五八～一六一五）に活動した紹巴の門人である。

この祐範と宗具との関係で、特に注目したいのが二人とも『狭衣物語下紐』を書写し、その二つの写本が同系統の本であるという点である。宗具本については、冒頭に提示した通りであるが、祐範本も紹巴がこの注釈書を書き上げた後の早い時期に写した本であるという位置づけがなされている。[40] 宗具と同座が多い祐範が『狭衣物語下紐』を書写し、それが同系統であるという点から、宗具本の書写者は奈良連歌師の「興福寺成林坊」の宗具だという確認ができる。そして宗具は祐範と親しい間柄であったというのが、二つ目の留意点である。

ここまで宗具の出座した連歌会について見てきたが、先の史料等も含め、一応、宗具を考察する材料は列記した。以下、それらによって、不明な点も残るが、蛍の巻の書写者の宗具について見解を述べてみたい。

宗具の書写にかかる蛍の巻を含むこの『源氏物語』揃が書写されたのは、寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）と考えられ、[41] そうすると⑯⑰にある寛永六年（一六二九）の連歌会に出座している宗具は、年代的に蛍の巻の書写者と同一人物である可能性が高いといえる。

その⑯⑰の連歌会は先に記したように、加藤正方[42]の張行であった。正方は加藤清正を支え続けた可重が父であり、加藤家の重臣として八代城主となり、清正没後、主家改易により牢人となった。西山宗因は正方によって京都の里村家に留学し、里村玄的は改易後に正方に従い江戸に旅行している。このように、里村家の人々とも親しい人物である。

この加藤家との繋がりでいえば、江村専斎も前に掲げた、『近世畸人伝』の中に「始加藤肥後侯（清正朝臣也。）に仕へ、」とあり、専斎は永禄八年（一五六五）の生まれで、⑯⑰の正方の連歌会が催された寛永六年（一六二九）には、六十五歳で存命である。そのため昌琢や玄仲と同じく江戸に行き宗具として名を連ねたとも考えられる。そして、丁度この頃、蛍の巻の書写も行なわれたという見方も可能となる。

更に、この『源氏物語』揃の書写作業は、昌琢を中心とした里村家の主導であった。この点から、専斎と里村家との関係について触れておけば、専斎が口述し孫の伊藤坦庵が筆記した『老人雑話』という随筆の冒頭近い部分に、

連歌師の次第

昌休┐┌昌叱┐（紹巴の弟子）昌琢　昌程
紹巴┘（昌休の弟子）　└玄仍（昌叱の婿）　玄的

という里村家に関する記述がある。また、『近世畸人伝』には、

京に登り、宗具に及ぶまで、新在家といふ街に住り。

という宗具の居所に触れた箇所があり、そこにある「新在家」は鈴木棠三氏[43]が、

新座池とも書く。烏丸通と東洞院との間、出水と長者町との間の地をいう。宗祇が住んで以来連歌師の住居が多かった。

と記す、現在の京都市上京区の地名である。「連歌師の住居が多かった。」というように、そこには、蛍の巻の二つ前に位置する初音の巻を書写した、昌琢の弟の昌倪も住んでいた。[44]そうすると、宗具と昌倪は旧知の間柄であったという推察も可能となる。

ここまで、蛍の巻が書写された頃に生存が確実にわかる人物という観点から、⑯⑰の連衆である宗具と江村専斎を蛍の巻の書写者と想定して考えてみたが、⑯⑰の連衆である宗具と江村専斎が別人である可能性等、なお不明な点も残るといえる。

ただ、蛍の巻を書写した宗具は、もう一つ早蕨の巻の書写も担っており、「筆功」という書写専門家の岡本主

水を除けば、複数の巻の書写を担当する人物が少ない中にあって、二つの巻の書写を担当できた宗具は、この書写作業を主導した里村家に何らかの意味で近い人物であった点は間違いないといえる。

宗具の「蛍」に続く「常夏」の書写者である石井了俱については、既に翻刻した「末摘花」も了俱の書写であり、以前、そちらで触れたので省略する。

三、能舜・北畠殿・水無瀬中将殿

『奥の細道』の旅において、松尾芭蕉は元禄二年（一六八九）七月二十四日から二十六日まで小松に滞在し、その時、梅林院（小松天満宮）に能順を訪問した。[45] 能順は寛永五年（一六二八）に生まれ、長じて連歌界の第一者で、小松天満宮の初代別当にもなり、京都と小松で活躍した人物である。芭蕉との邂逅を得た晩年は小松在住で、同所で没し墓所も小松に残っている。

この能順の父が「野分」の書写者、能舜である。棚町知彌氏[46]が翻刻した『能順自筆発句書留（抄）』の中に、

元禄三午元三　63歳
能舜法師五十年忌
「能舜五十回忌」
わか身こそ古き形見の忍草

元禄十三庚辰年　73歳

八月八日亡父能舜大徳六十年忌

したひみる程や雲井の西の月

とあり、能順の父であったとわかる。その没年について同氏は「六十年忌、五十年忌より逆算すれば寛永十七年没となるが、寛永十九年春までは生存」と述べる。没年については『連歌総目録』によると、能舜の最も遅い年代がわかる連歌会の記録は、寛永十六年（一六三九）一月二十八日の百韻であり、やはり、寛永十年代の後半に没したと考えられる。そうすると、この「野分」が書写された寛永四年（一六二七）から寛永六年（一六二九）頃は晩年にあたるといえる。

その頃、能舜が出座した連歌会は、

寛永三年（一六二六）四月十二日　臨江斎、紹巴法眼、廿五回忌　懐旧百韻

発句　花やあはれ無かこと葉の名取草

玄仲十三・玄的九・玄陳九・昌倪十・慶純十・宗順九・了倶九・友継八・能舜八・吉真七・宣滋七・能吉一

のみであり、この連歌会に名前が見られる玄仲、玄的、玄陳、昌倪、宗順、了倶は、この『源氏物語』揃の書写者でもある。

この能舜の連歌活動について触れれば、最も早い連歌会の記録は、天正九年（一五八一）四月一日であり、これ以降、幾つかの連歌会に出座して、前出の寛永十六年（一六三九）一月二十八日の百韻が最も遅い記録となる。この間、五十八年、この年数から没年齢は恐らく七十歳を過ぎていたのでないかと思われる。

その能舜の家族がわかる記述もある。『加能俳諧史』[47]には、子息能順の菩提寺である誓円寺過去帳の抄録として、

浄室清山大姉　元禄四年　十月　五日没　能順母（能舜妻）
雪香能拝大徳　元禄四年十二月　六日没　能順兄（能舜子息）
紫光清雲大姉　元禄五年　六月廿三日没　能順姉（能舜子女）
最蓮社勝誉法橋能順大徳　宝永三年十一月廿八日没　（能舜子息）

という記載がある。括弧内は、能舜から見た関係を補足しておいた。

ところで「野分」の書写を担当した能舜と同じく、この『源氏物語』揃の『筆者目録』に「北野衆」と注記がある人物としては、「匂宮」の能通、「紅梅」の能円の二人がいる。この「北野衆」の三人が担当している巻を見ると、分量がそれほど多くない巻の書写者として抜擢されているといえる。その北野社関係者の三人の中の最年長者が能舜であり、残りの二人が書写した「匂宮」「紅梅」に先立つ「野分」の書写者に選出されたと思われる。

次に、「篝火」の書写者である北畠殿について触れておきたい。『信長公記』[48]巻二にある永禄十二年（一五六九）の記述に、

十月四日、大河内の城、滝川左近・津田掃部両人に相渡し、国司父子は笠木・坂ないと申す所へ退城候なり。然間、田丸の城初めとして国中城々破却の御奉行万方へ仰付けらる。

という箇所がある。織田信長の伊勢進攻により、「国司父子」の北畠具教、同具房が降伏し開城した様子を記している。この引用の直前には、「九月九日、（中略）種々御詫言候て、信長公の御二男お茶筌へ家督を譲り申さる御堅約にて」とあり、この約束により天正三年（一五七五）具房は、信長の次男信雄に北畠の家督を譲った。その翌年、具教、具房は信長の策謀によって滅ぼされ、南朝の名臣、北畠親房の流れである北畠家は滅亡した。

その北畠家を再興したのが中院通勝の二男、親顕である。遡れば北畠家は中院家の別れであり、本流から養子

を迎えたといえる。『公卿補任』[49]（『系図纂要』[50]も参考）によって、親顕の主な経歴をまとめ年譜にすると次のようになる。

年月日		年齢	事項
慶長	八年（一六〇三）九月二十八日	1	中院通勝の二男として誕生。
	十二年（一六〇七）正月六日	5	叙爵。
	十七年（一六一二）十二月二十八日	10	元服、昇殿。侍従従五位上。
元和	八年（一六二二）正月十一日	20	左中将。
寛永	三年（一六二六）八月十二日	24	正四位下。
	四年（一六二七）九月二十四日	25	参議。北畠流相続。
	七年（一六三〇）八月三日	28	没。

この年譜に「篝火」が書写された寛永四年（一六二七）から寛永六年（一六二九）を当てはめてみると、北畠家を相続し、参議に補せられた二十五歳から二十七歳の間となる。連歌会への出座も確認できず、周知のように『源氏物語』で最も短い巻である「篝火」の書写者への登用は、「北畠殿」と敬称が付されている通り、公卿である親顕が書写者に加わり、この『源氏物語』揃の価値をより高めるという意味合いが濃いと考えられる。

また、親顕の父、中院通勝は『岷江入楚』を著した高名な源氏学者であり、中院を相続した実兄道村は、この書写が行なわれた頃に近い寛永元年（一六二四）には、朝廷と幕府の連絡役である武家伝奏になっている。そして、この『源氏物語』揃が徳川家所縁の品[51]であった点なども勘案すると、親顕の書写への参加の背景には中院家の存在も窺えるのである。

この北畠親顕と同様、堂上家の書写者として、「藤袴」を担当した「水無瀬中将殿」がいる。「藤袴」の書写がおこなわれた寛永四年（一六二七）から寛永六年（一六二九）の期間を念頭において考えると、水無瀬家でこの当時「中将」であったのは、兼俊である。

その兼俊の主な経歴を『公卿補任』[52]（『系図纂要』[53]も参考）によって年譜にすると、次のようになる。

年	月	日	年齢	事項
文禄	二年（一五九三）	九月	一日	1	水無瀬氏成の嫡男として誕生。
慶長	二年（一五九七）	正月	五日	5	叙位。
	八年（一六〇三）	十一月二十四日	11	侍従。
	十九年（一六一四）	正月	十一日	22	左少将。
元和	二年（一六一六）	正月	十一日	24	左中将。
寛永	五年（一六二八）	正月	六日	36	非参議、従三位。
慶安	元年（一六四八）	十二月二十二日	56	権中納言、従二位。翌年辞退する。
明暦	二年（一六五六）	正月	一日	64	没。

この年譜から兼俊が「藤袴」の書写をしたと考えられる、寛永四年（一六二七）から寛永六年（一六二九）は、兼俊の年齢では、三十五歳から三十七歳にあたり、左中将や兵衛督であった頃だといえる。

またこの時期の兼俊の連歌会出座は見られないが、父氏成は、幾つかの連歌会にも出座している。次に「藤袴」が書写された頃を含む寛永元年（一六二四）から五年（一六二八）までの氏成が出座した連歌会と、そこで連衆となっているこの『源氏物語』揃の題僉を書いた八条宮と、書写者を掲げておく。

年	月　日	氏成	八条	昌琢	昌俔	玄陳	玄的	宗順	玄仲
寛永三年（一六二六）	三月　十日	○	○	○	○	○	○	○	
	五月　四日	○						○	○
	十月　九日	○	○	○	○	○		○	
四年（一六二七）	一月二十一日	○	○				○	○	
	三月	○	○	○	○	○		○	
五年（一六二八）	八月　十日	○	○	○	○	○	○		
	九月	○	○	○	○				
六年（一六二九）	十月　九日	○		○	○	○	○		

これを見ると、殆どが八条宮と里村一族との同座であり、この書写作業の主幹に当たる人々との交流が窺える。この父、氏成の連歌会における繋がりによって、兼俊は「藤袴」の書写者となり、前出の北畠親顕と共に、この『源氏物語』揃の書写者に堂上家の名前を加えて、その価値を高めたといえるのである。

四、本文のミセケチ・補入等

ここではミセケチ、補入等に着目して、今回翻刻した「蛍」「常夏」「篝火」「野分」「藤袴」の五巻におけるその数を調べると、次のようになっている。参考のため、以前調査した「桐壺」から「胡蝶」に「宿木」「橋姫」「手習」を加えた表も掲げた。

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
賢木	岡本主水	94	55	6	21	59	235
花散里	行生	2	2	1	1	4	10
須磨	信岩	34	33	11	55	84	217
明石	岡本主水	79	40	9	25	99	252
澪標	岡本主水	55	17	6	5	64	147
蓬生	岡本主水	71	28	5	6	14	124
関屋	玄陳	4	5	2	2	6	17
絵合	宗琢	51	26	2	0	30	109
松風	玄仍息女	4	0	4	0	0	8

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
桐壺	昌琢	2	7	0	1	47	57
帚木	玄陳	0	0	2	0	0	2
空蟬	玄的	0	1	0	0	0	1
夕顔	岡本主水	76	48	2	14	113	253
若紫	岡本主水	70	49	10	14	150	293
末摘花	了倶	2	0	1	0	0	3
紅葉賀	宗因	48	29	4	7	28	116
花宴	左馬助	7	3	1	10	2	23
葵	観智院	4	4	8	3	0	19

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
蛍	宗具	36	49	24	1	38	148
常夏	了倶	20	28	7	17	20	92
篝火	親顕	1	5	8	2	0	16
野分	能舜	18	24	9	4	21	76
藤袴	兼俊	0	0	0	0	0	0

巻	薄雲	朝顔	少女	玉鬘	初音	胡蝶	橋姫	宿木	手習
書写者	岡本主水	紀金	岡本主水	岡本主水	昌倪	八幡田中	岡本主水	宗因	岡本主水
ミセケチ	90	57	134	93	7	53	101	22	120
補入	34	6	35	26	10	17	25	19	64
傍書	2	4	5	13	6	9	17	12	11
合点	15	11	13	8	14	4	10	0	18
朱点	55	18	60	55	30	27	49	0	143
総計	196	96	247	195	67	110	202	53	356

今回翻刻した五巻について見ると、最終丁に「一校了・兼校了」と注記のある巻はない。また、「蛍」「常夏」「野分」は、分量としは同程度の長さであるが、ミセケチ、朱点等の総数を見ると宗具の書写した「蛍」に特に多いといえる。更に、「常夏」を担当した了倶は、表でわかるように「末摘花」も書写しているが、「末摘花」はその総数が三であるのに対して、今回の「常夏」の総数は九十二であり、その数が大きくかけ離れている。そして、特に目を引くのが氏成が書写した「藤袴」にはミセケチ、朱点等が全くないという状況であった。

これらミセケチ、朱点等についての見解や結論は、やはり、すべての巻の調査の後、また、更に多くの巻の傾向を把握した後にするとして、ここでは氏成が書写した「藤袴」には、ミセケチ、朱点等が存在せず、了倶の担当した二つの巻において、ミセケチ、朱点等の数が大きく違うという現状の認定に留めておきたい。

五、結語

前田利家の四男で、加賀藩の三代藩主利光が能舜に宛てた書簡[54]が小松天満宮に現存する。また、元和八年（一六二二）六月十七日には、時の将軍徳川秀忠の発句で前田家の人々が連歌を興行した際、能舜も一座している連歌会の記録[55]もある。

元和八年六月十七日

賦何路連歌

涼しさのこゝろの松や千代の陰　御上
みどりそひゆく門のわか竹　利光
さかえすむ宿はいらかのかさなりて　亀鶴
つくるやひろきみぎりなるらん　犬千代
友鶴のなれよる池の水きよみ　千勝
いはほづたひのひかりしづけし　宮松
月もたゞ色にやなびくを田の原　御萬
さかりしらるゝはなの萩がえ　御ふう
するゑも猶はれゆく霧のまがきにて　惣代
こてふ吹きたつ野邊のあき風　能舜

草むらの下もえやまだあさからん　　久　悦
雪のこりぬるみちのかたはら　　能　運
（下略）

この連歌会や書簡によって、能舜は前田公と親しい様子が窺える。そうすると時代が下り子息能順が小松天満宮の初代別当として、加賀へ来る素地は、既に父の代にあったといえる。

そして、この『源氏物語』揃の書写者である能舜が前田公に繋がる連歌師であった点は、石井了倶と伊達家、西山宗因と加藤家、大鳥居信岩と黒田家という書写者の背景には有力大名がいるという図式に前田家も加わったのである。

そして、今回は公家の書写者の参画も見られた。「篝火」の書写者、北畠親顕は参議であり、実父はよく知られた源氏学者の中院通勝である。また、「藤袴」の書写者、水無瀬兼俊は、権中納言であった父の氏成を通して、八条宮や後水尾院にも繋がる。このように見てくると、この『源氏物語』揃の書写者を通して、今回も寛永期に活躍した多彩な人々が浮かび上がって来たといえるのである。

翻刻凡例

一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
一、和歌は改行をし、二字下げとした。
一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
一、本文の傍書は原本通りとした。
一、補入記号がある場合は該当箇所に「〇」を付し、補入文字は右に記した。
一、漢字の踊字「〳〵」は、そのままとした。
一、本文の朱点は「・」で示した。
一、朱合点は、傍線で示した。

（ほたる）

いまはかくおも〳〵しきほとによろつのとやか
におほししつめたる御ありさまなれはたのみ
聞えさせ給へる人々さま〳〵につけてみな
おもふさまにさたまりたゝよはしからてあら
まほしくてすくし給・ふたいのひめ君こそいとお
しくおもひのほかなる思ひそひていかにせん
とおほしみたるめれかのけんかうかりしさまに
はなすらふへきけはひならねとかゝるすち
にかけても人のおもひよりきこゆへきこと
ならねは心ひとつにおほしつゝさまことにうと

1オ

ましと思ひ聞え給なにことをもおほししりにた
る御よはひなれはとさまかうさまにおほしあつ
めつゝはゝ君のおはせすなりにけるくちおし
さも又とりかへしおしくかなしくおほゆお

とゝもうちいてそめ給ては中〳〵くるしく
おほせと人めをはゝかり給ひつゝはかなきこと
をもえ聞え給はすくるしくもおほさるゝまゝ
にしけくわたり給ひつゝおまへの人とをく
のとやかなるおりはたゝならすけしきはみ聞え
給ことにむねつふれつゝけさやかにはしたなく

1ウ

聞ゆへきにはあらねはたゝみしらぬさまに
もてなしきこえ給人さまのわらゝかにけち
かくものし給へはいたくまめたち心し
給へと猶をかしくあいきやうつきたるけ
はひのみみえ給へは兵部卿〇宮なとはまめやかに
せめきこえ給御らうのほとはいくはくならぬに
さみたれになりぬるうれへをし給てすこし
けちかきほとをたにゆるし給はゝおもふこと
をもかたはしはるけてしかなと聞え給へるを
殿こ覧してなにかはこの君たちのすき給

2オ

はんはみところ〇ありなんかしもてはなれてな
聞え給ひそとをしへて御かへりとき〳〵
きこえ給へとのたまへといとゝうたて覚え
給へはみたり心ちあし〇とてきこえ給はす
人々もことにやんことなくよせおもきなともお
さ〳〵なしたゝはゝ君の御おちなりける宰相
はかりの人のむすめにて心はせなとくちおし
からぬかよにをとろへ残りたるをたつねと
り給へるそさい将の君とて手なともよろし
くかき大かたもおとなひたる人なれはさる

2ウ

へきおり〳〵の御かへりなとかゝせ給へはめし
いてゝこと葉なとの給てかゝせ給・ものなとの
給さまをゆかしとおほすなるへし・さうし
みはかくうたてあるものなけかしさのゝち
はこの宮なとあはれけに聞え給ときはす
こしみいれ給ときもありけりなにかとお
もふにはあらすかくこゝろうき御けしき見ぬ
わさもかなとさすかにされたる所つきて
おほしけり・とのはあいなくをのれ心けさうし
て宮を待聞え給もしり給はてよろしき御

3オ

返り〇あるをめつらしかりていと忍やかに〇お
はしましたりつま戸のまに御しとねま
いらせて御几丁はかりをへたてにてちかき
ほとなりいといたく心してそらたきもの心
にくきほとに匂はしてつくろひおはするさま
おやにはあらてむつかしきさかしら人のさす
かにあはれにみえ給さい将の君なとも人の
御いらへ聞えんこともおほえすはつかしくて
ゐたるをむもれたりとひきつみ給へはいと
わりなし・夕やみすきておほつかなき空

3ウ

のけしきのくもらはしきにうちしめりたる
宮の御けはひもいとえんなりうちより
ほのめくをひかせもいとゝしき御匂ひの

たちそひたれはいとふかくかほりみちて
かねておほしゝよりもおかしき御けはひ
を心とゝめ給ひけりうちいてゝおもふ心のほと〇(を)
のたまひつゝけたることの葉おとな〳〵しく
ひたふるにすき〳〵しくはあらていとけはひ
ことなりおとゝいとおかしとほのきゝおはす姫
君はひんかしおもてにひきいりておほとの

4オ

こもりにけるをさい将の君〇(の)御せうそこつたへ
にいさり(る)いりたるにつけていとあまりあ
つかはしき御もてなしなりよろつの事
さまにしたかひて(たるイ)こそめやすけれひたふるに
わかひ給ふへきさまにもあらすこの宮たち
をさへさしはなちたる人つてに聞え給まし
きことなりかし御こゑこそおしみ給ふとも
すこしけちかくたにこそなといさめ聞え
給へはいとわりなくてことつけてもはひいり
給ぬへき御こゝろはへなれはとさまかうさまに

わひしけれはすへりいてゝもやのきはなるみ
き丁のもとにかたはらふし給へりなにくれと
ことなかき御いらへ聞え給ふこともなくおほし
やすらふにより給て御几張のかたひら(をイ)を
ひとへうちかけ給ふにあはせてさとひかる
ものしそくをさし出たるかとあきれたり蛍
をうすきかたにこの夕つかたいとおほくつゝみ
をきてひかりをつゝみかくし給へりけるを
さりけなくとかくひきつくろふやうにて
俄にかくけちえんにひかれるにあさまし

4ウ

くてあふきをまし(く)かさし給へるかたはらめいと
おかしけなりおとろ〳〵(かイ)しきひかりみえは宮
ものそき給なんわかむすめとおほすはかりの
おほえにかくまての給なめり人さまかた
ちなといとかくしもくしたらんとはえをし
はかり給はしいとよくすき給ぬへき心まとは(をイ)

5オ

さんとかまへありき給なりけりまことのわか
姫君をはかくしもゝて〇さはき給はし〇うたて
ある御心なりけりことかたよりやをらす
へり出てわたり給ひぬ・宮は人のおはする

5ウ

ほとさはかりとをしはかり給かすこしけちか
き〇けはひするに御心ときめきせられ給て
えならぬうすものゝかたひらのひまより
みいれ給へるにひとまはかりへたてたる見わた
しにかくおほえなきひかりのうちほのめくをお
かしと見給ほともなくまきらはして〇かくしつ
されとほのかなるひかりえんなることのつまにも
しつへくみゆほのかなれとそひやかにふし
給へりつるやうたいのをかしかりつるをあかす
おほしてけにあのこと御心にしみ〇けり

6オ

なくこゑも聞えぬむしの思ひたに人の
けつにはきゆるものかはおもひしり給ぬやとき
こえ給かやうの御返しをおもひまはさんもねち
けたれはときはかりをそ
こゑはせて身をのみこかすほたるこそいふ
よりまさる思ひなるらめなとはかなくきこえ
なして御みつからはひきいり給にけれはいとはる
かにもてなし給うれはしさをいみしううらみ
聞え給すき〳〵しきやうなれはゐ立給もあかさて
軒の雫もくるしさにぬれ〳〵夜ふかくいて

6ウ

給ぬほと〇きす〇かならすうち啼けんかしうるさ
けれはこそきゝもとゝめね・御けはひなとのなま
めかしさはいとよくおとゝの君にたてまつり
給へりと人々もめて聞ゆ・よへいとめおやたち
てつくろひ給ひし御けはひをうち〳〵はしらて
哀にかたしけなしとみないふ・ひめ君はかく
さすかなる御けしきをわかみつからのうさそ
かしおやなとにしられ奉るよの人めきたるさ
まにてかやうなる御心はへならましかはなとかは

いとにけなくもあらまし人ににぬありさまこそ

つゐに世かたりにやならんとおきふしおほしな
やむ・さるはまことにゆかしけなきさまには
もてなしはてしとおとゝはおほしけり猶さる
御こゝろくせなれは中宮なともいとうるはしくや
は思ひ聞え給へることにふれつゝたゝならすき
こえうこかし〇給へとやんことなきかたのをよひな
まにわつらはしくておりたちあらはしきこえ
給はぬをこの君は人の御さまもけちかくいまめ
きたるにをのつからおもひ忍ひかたき〇おり〳〵
人見奉りつけはうたかひをひぬへき御もてなし

7オ

なと〇うちましるわさなれとありかたくおほし
かへしつゝさすかなる御中なりけり・五日
には馬はのおとゝに出給けるついてにわたり
給へりいかにそや宮はよやふかし給ひしいた
くもならしきこえしわつらはしきけそひ給

7ウ

へる人そや人の心やふりものゝあやまちす
ましき人はかたくこそあれけれなといけみころ
しみいましめおはする御さまつきせすわかく
きよけにみえ給つやも色もこほるはかりなる
御そに〇なをしはかなくかさなれるあはひもい

8オ

つこにくはゝれるきよらにかあらんこのよの人
のそめいたしたるとみえすつねの色もかへぬ
あやめもけふはめつらかにおかしうおほゆる
かほりなともおもふことなくはおかしかりぬへき
御ありさまかなと姫君はおほす・宮より御ふみ
あり白きうすやうにて御手はいとよしあり
てかきなし給へりみるほとこそおかしかり
けれまねひいつれはことなることなしや
　けふさへやひく人もなきみかくれに
おふるあやめのねのみなかれんためしにもひ

8ウ

きいてつへきねに結ひつけ給へれはけふの御

かへりなとそゝのかし聞ゆれとをきて出給
ぬこれかれも猶と聞ゆれは御心にもいかゝおほし
けむ

あらはれていとゝあさくもみゆるかな

あやめもわかすなかれけるねのわか〳〵しくと
はかりほのかにそあんめる手をいますこし
ゆへつけたらはと宮はこのましき御心にいさゝか
もあかぬことに見給(とイ)けんかしくす玉なとえな
らぬさまにてところ〳〵よりおほかりおほし

9オ

しつみつるとし比の名残なき御ありさまにて
こゝろゆるひ給ふこともおほかるにおなしくは
人のきすつくはかりのことなくてもやみにし
かなといかゝおほさゝ覧・殿はひむかしの御かた
にもさしのそき給て中将のけふのつかさのて
つかひのつゐてにをのこともひきつれて物
すへきさまにいひしをさるこゝろし給へまた
あかきほとにきなんものそあやしくこゝには

わさとならす忍ふることをもこのみこたちの聞
つけてとふらひものし給へはをのつからこと〳〵
しくなんあるをようゐし給へなと聞え給
むまはのおとゝはこなたのらうより見と
をすほと遠からすわかき人々わたとのゝ戸
あけてものみよや左のつかさにいとよし
ある官人あるころなりせう〳〵の殿上人に
をとるましとの給へはもの見んことをいとおかしと
おもへり(ふあイ)・たいの御かたよりもわらはへなと物見に
わたりきてらうのとくちにみすあをやかに
かけわたしていまめきたるすそこの御几張
ともたてわたしわらはしもつかへなとさまよふ

9ウ

さうふかさねのあこめふたあゐのうすものゝかさ
みきたるわらはへそにしのたいのなめる
このましくなれたるかきり四人しもつかへは
あふちのすそこのもなてしこのわかはの色し

10オ

たるからきぬけふのよそひともなり・こなた
のはこきひと〇かさねになてしこかさねのか
さみなとおほとかにて〇をの〳〵いとみかほなるも
てなしみ所ありわかやかなる殿上人なとは
めをたてつゝけしきはむひつしのとき〇に
むまはのおとゝに出給てけにみこたちおはし

10ウ

つとひたり・手つかひのおほやけことにはさま
かはりてすけたちかき〇つれまいりてさまことに
今めかしくあそひくらし給・女はなにのあや
めもしらぬことなれとゝねりともさへえんなるさう
そくをつくして身をなけたるてまとはしなと
をみるそおかしかりけるみなみのまちもとをし
てはる〳〵とあれはあなたにもかやうのわかき人
ともは見けり打毬楽らくそんなとあそひて
かちまけのらんさうとものゝしるも夜に入はてゝ
なに事もみえすなりはてぬとねりとものろく

11オ

しな〳〵給はるいたくふけて人々みなあかれ給ぬ・
おとゝはこなたにおほとのこもりぬ物かたり〇き
こえ給て兵部卿〇宮の人よりはこよなくものし給
かなかたち〇はすくれねとよういけしきなとよし
ありあいきやうつきたる君なり忍ひて見は
給つやよしといへとなをこそあれとの給御をとう
とにこそ物し給へとねひまさりてそ見え給
ける年ころかくおりすくさすわたりむつひき
こえ給ふときゝ侍〇れとむかしの内わたりにてほの
み奉りし後おほつかなし〇いとよくこそかたち

11ウ

なとねひまさり給にけれそちのみこよく物
し給めれとけはひをとりておほ君けしき
にそものし給ひけるとの給へはふと見しり
給にけりとおほせとほゝゑみてなをあるを
はよしともあしともかけ給はす・人のうへをなん
つけおとしめさまのこといふ人をはいとおしき物
にしたまへは右大将〇をたに心にくき人にす

めるをなにはかりかはあるちかきよすかにてみん
はあかぬことにやあらんとみ給はことにあらはし
てもの給はす今はたゝ大かたの御むつひにてお

12オ

ましなともこと〳〵にておほとのこもりなとてかく
はなれそめしなと殿はくるしかり給大
かたなにやかやともそはみ聞こえ給はて年
比かくおりふしにつけたる御あそひともを人つて
にのみみきゝ給けるにけふめつらしかりつること
はかりをそこのまちのおほえきら〳〵しとおほしたる
その駒もすさめぬ草と名にたてるみき
はのあやめけふやひきつるとおほとかに聞え
給なにはかりのことにもあらねとあはれとおほしたり
にほとりにかけをならふるわか駒はいつか

12ウ

あやめにひきわかるへきあいたちなき御こと
ともなりや朝夕のへたてあるやうなれと
かくてみ奉るは心やすくこそあれとたはふ

れことな〇とのとやかにおはする人さまなれはし
つまりて聞えなし給ゆかをはゆつり聞え給て
御き丁〇へたてゝおほとのこもるけちかくなと
あらんすちをはいとにけなかるへきことにおもひ
はなれはてきこえ給へれはあなかちにもきこえ給
はす・なか雨れいのとしよりもいたくしてはるゝ
かたなくつれ〳〵なれは御かた〳〵絵なと物かたり

13オ

なとのすさひにてあかしくらし給あかしの御かた
はさやうのことをもよしありてしなし給て
姫君の御かたに奉り給・にしのたいのはまして
めつらしくおほえ給ことのすちなれはあけくれ
かきよみいとなみおはすつきなからぬわか人
あまたありさま〳〵にめつらかなる人のうへなと
をまことにやいつはりにやいひあつめたる中にも
わかありさまのやうなるはなかりけりと見
給すみよしの姫君のさしあたりけんおりは
さるものにていまの世のおほえもなを心ことな

めるにかそへのかみかほと〳〵しかりけんなとそか
のけんかゆゝしさをおほしなすらへ給・とのも
こなたにかなたにかゝるものともものちりつゝ御めに
はなれねはあなむつかし女こそ物うるさからす人
にあさむかれんとむまれたるものなれこゝら
の中にまことはいとすくなからんをかつしる〳〵
かゝるすゝろことに心をうつしはかられ〇給てあつか
はしきさみたれのかみのみたるゝもしらてかき給
よとてわらひ給ものから又かゝるよのふること
ならてはけになにをかまきるゝことなきつれ〳〵

13ウ

をなくさめましさてもこのいつはりともの中
にけにさもあらんとあはれをみせつき〳〵しう
つゝけたるはたはかなしことゝしりなからい
たつらにこゝろうこきらうたけなる姫君の物
おもへるみるにかた心つくかし・またいとある
ましきことかなとみる〳〵おとろ〳〵しく(く)とり

14オ

なしけるかめおとろきてしつかに又きくたひ
に(そ)にくけれとふとおかしきふしあらはなる
なともあるへしこのころおさなき人の女はう
なとにとき〳〵よまするをたちきけは物

14ウ

よくいふものゝ世にあむへきか〇そらこと(なイらイ)をよく
しなれたるくちつきよりそいひ出すらんとお
ほゆれとさしもあらしやとの給へは・けにいつ
はりなれたる人やさま〳〵にさもくみ侍らん
たゝいとまことの事とこそおもひ給へられけれとて
すゝりをゝしやり給へは・こちなくも聞えおと
してけるかな神代より世にあることをしるし
をきけるなゝり日本記なとはたゝかたそはそ
かしこれらにこそみち〳〵しくくはしきことは
あらめとてわらひ給その人のうへとてありのまゝ

15オ

にいひいつることこそなけれよきもあしきも
世にふる人のありさまのみるにもあかす聞にも

あまることを後の世にもいひつたへさせまほ
しきふし〳〵を心にこめかたく〇いひをきはしめた
るなりよきさまにいふとてはよきことのかきり
えりいて人にしたかはんとては又あしきさまに
めつらしきことをとりあつめたるみなかた〳〵に
つけたたるこの世のほかのことならすかし人の
みかとのさえつくりやうかは〇るおなしやまとの
国のことなれはむかしいまのにかはる〇へしふかき事

15ウ

あさきことのけちめこそあらめひたふるに空
ことといひいてんもことの心たかひてなんありける・
ほとけのいとうるはしきこゝろにてときをき
給へる御法もはうへんといふことありてさとり
なきものはこゝかしこたかふうたかひをゝき
つへくなんはうとう経の中におほかれといひ
もてゆけはひとつむねにありて〇ほんなうと
のへたゝりなんこの人の〇よしあしきはかりのこと
はかはりける・よくいへはすへてなに事もむ

なしからすなりぬやと物かたりをいとわさとの

16オ

ことにの給ひなしつさてかゝるふることの中にま
ことかやうにしほうなるしれものゝ物かたりは
有やいみしうけとをきものゝ姫君も〇心のやう
につれなくそらおほめきしたるはよにあらし
ないさたくひなきものかたりにして世につた
へさせんとさしよりて聞え給へはかほをひ
きいれて・さらすともかくめつらかなることは
世かたりにこそはなり侍りぬへかめれとのた
まへはめつらかにやおほえ給けにこそ又なき
こゝちすれとてよりゐ給へるさまいと衷なり

おもひあまりむかしのあとをたつぬれと
おやにそむける子そたくひなきふけうな
るはほとけのみちにもいみしくこそいひたれ
とのたまへとかほ〇もたけ給はねは御くしをか
きやりつゝいみしううらみ給へはからうして

16ウ

ふるきあとをたつぬれとけになかりけり
このよにかゝるおやのこゝろはときこえ給もこゝ
ろはつかしけれはいといたくもみたれ給はす・か
くしていかなるへき御ありさまならん・むらさ
きのうへも姫君の御あつらへにことつけてもの

17オ

かたりはすてかたくおほしたりこまのゝもの
かたりのゑにてあるをいとよくかきたるゑかな
とてこらんすちいさき女君のなにこゝろもなくて
ひるねし給へるところをむかしのありさまお
ほしいてゝ女君はみたまふ・かゝるわらはとち
たにいかにされたりけりまろこそなをためし
にしつへく心のとけさは人にゝさりけれと
きこえいて給へりけにたくひおほからぬ事
ともはこのみあつめ給へりけりかし姫君の
御まへにてこのよなれたる物かたりなとなよみ

17ウ

きかせ給ひそみそか心つきたるものゝむす
めなとはおかしとにはあらねとかゝること世に
はありけりとみなれ給はんそゆゝしきや
との給もこよなしとたいの御かたきゝ給はゝ
心をき給つへくなん・うへ心あさけなる人
まねともはみるにもかたはらいたくこそうつ
ほの藤はら〇君のむすめこそいとおもりかにはか
〳〵しき人にてあやまちなかめれとすくよかに
いひ出たる〇しわさも女しきところなかめるそ
ひとやうなめるとの給へは・うつゝの人もさそ

18オ

あるへかめる人々しくたてたるおもむき
ことにてよきほとにかまへぬや・よしなからぬ
おやのこゝろとゝめておほしたてたる人のこめ
かしきをい〇けるしるしにてをくれたること
おほかるはなにわさをしてかしつきし
そかしとおやのしわささへ思ひやらるゝこそ
いとをしけれけにさいへとその人のけはひ
よとみえたるはかひありおもたゝしかし

こと葉のかきりまはゆくほめをきたるに
しいてたるわさいひ出たることの中にけに
とみえ聞ゆることなきいと見をとりするわ
さなりすへてよからぬ人にいかて人ほめさせ
しなとたゝこのひめ君ゆてんつかれ給ましま
とよろつにおほしの給ふまゝはゝのはらきた
なきむかしものかたりもおほかるを心みえ
にこゝろつきなしとおほせはいみしくえり
つゝなんかきとゝのへさせ絵なとにもかゝせ給
ける・中将の君をこなたにはけとをくもてなし
聞え給へれとひめ君の御かたにはさしはなち
聞え給はすならはし給わか世のほとはとても

18ウ

かくてもおなしことなれとなからんよを思ひ
やるに〇見つき思ひしみぬることゝもこそとり
わきてはおほゆへけれとてみなみおもてのみす
のうちはゆるし給へりたいはん所の女はう

19オ

のなかはゆるし給はすあまた〇おはせぬ御なからひ
にていと心もちゐなともやんことなくかしつき
聞えたまへり大かたのこゝろもちゐなとも〇の〳〵
しくまめやかにものしたまふ君なれはうしろ
やすくおほしゆつれりまたいはけたる御ひ
いなあそひなとのけはひのみゆれはかの人のも

19ウ

ろともにあそひてすゝしく年月のまつ思ひ
出らるれはひいなのとのゝ宮つかひいとよくし
給ており〳〵にうちしほたれ給けり・さもあり
ぬへきあたりにははかなしことの給ふるゝは
あまたあれとたのみかくへくもしなさすさ
るかたになとかはみさらんと心とまりぬへきを〇
しゐてなをさりことにしなしてなをかのみと
りの袖をみえなをしてしかなとおもふこゝろ
のみそやんことなきふしにはとまりけるあな
かちになとかゝつらひまとはゝたふるゝかた

20オ

にゆるし給もしつへかめれとつらしとおもひし
おり〳〵いかて人にもことはらせ奉らんと思ひを
きし〇わすれかたくてさうしみはかりに(ことイ)には
をろかならぬあはれをつくしみせておほかたに
はいられおもへらす・せうとの君たちなともなま
ねたしなとのみ思ふことおほかり・たいの姫君の
御ありさまを右の中将はいとふかく〇しみて(おもひ)
いひよるたよりもいとはかなけれはこの君をそ
かこちよりけれと人のうへにてはもとかし
きわさなりけりとつれなくていらへて(イ)そものし

20ウ

給けるむかしのちゝおとゝたちの御なからひに
にたり・内のおとゝは〇はら〳〵いとおほかるにその(御子ともイ)
おひ出たる御人(おほえイ)からにしたかひつゝ心にまかせ
たるやうなる御いきほひにてみななしたて
給女はあまたもおはせぬを女御もかくおほ
しゝことのとゝこほり給ふ(ひイ)ひめ君もかくこと
たかふさまにてものし給へはいとくちおしと

おほすかのなてしこをわすれ給はす物のおり
にもかたり出給しことなれはいかになりにけん
物はかなかりけるおやのこゝろにひかれて

21オ

らうたけなりし人をゆくゑもしらす成に
たることすへて女こといはん物なんいかにも〳〵
めはなつましかりけるさかしらにわかことひて
てあやしきさまにてはふれやすらんとてもかく
ても聞え出こはとあはれにおほしわたる君た
ちにももしさやうなる名のりする人あらは
みゝとゝめよ心のすさひにまかせてさるまし
きこともおほかりし中にこれはいとしかをし
なへてのきはにも思はさりし人のはかなき物
うむしをしてかくすくなかりけるものゝくさ

21ウ

はひひとつをうしなひたることのくちおしき
ことゝつねにの給いつ中比なとはさしもあ
らすうちわすれ給けるを人のさま〳〵につけて

女こかしつき給へるたくひともにわかおもほ〇[す]
にしもかなはぬいとこゝろうくほいなくおほす
成けり夢み給ていとよくあはするもの
めしてあはせ給けるにもとし比御こゝろに
しられ給はぬ御子を人のものになしてきこし
めしいてんやと聞えたりけれは女この人の
こになることはおさ〳〵なしいかなることにか

22オ

あらんなとこの比そおほしの給へかめる

22ウ

（とこなつ）

いとあつき日ひんかしのつりとのに出給てすゝ
み給ふ中将の君もさふらひ給したしき殿
上人あまたさふらひてにし川よりたてまつれる
あゆちかき河のいしふしやうの物おまへにてて
してまいらすれいのおほとのゝきんたち中将の御
あたりたつねてまいり給へりさう〳〵しくねふた
かりつるおりよくものし給へるかなとておほみき
まいりひみつめしてすいはんなととり〳〵にさう
ときつゝくふ風はいとよくふけと日のとかに
くもりなき空のにし日になるほとせみのこゑ

1オ

なともいとくるしけに聞ゆれは水のうへむとく
なるけふのあつかはしさかなむらいのつみは
ゆるされなんやととよりふし給へりいともかゝ
るころはあそひなともすさましくさすかに
くらしかたきこそくるしけれ宮つかへするわ
かき人々たへかたからんなをひもとかぬほと
よこゝにてたにうちみたれこのころ世にあらん
ことのすこしめつらしくねふたささめぬへからん
かたりてきかせ給へなにとなくおきなひ〇たる心
ちしてせけんの事もおほつかなしやなとの

1ウ

たまへとめつらしき事とてうちいて聞えん
物かたりもおほえねはかしこまりたるやうにて
みないとすゝしきかうらんにせなかをしつゝ
さふらひ給いかてきゝし事そやおとゝの
ほかはらのむすめたつねいてゝかしつき給なる
とまねふ人ありしはまことにやと弁の少将にと
ひ給へはさまていひなすへき事にも侍らさ
りけるをこの春のころほひ夢かたりし給ひ
けるをほのきゝつたへ侍ける女のわれなんかこ
つへき事あるとなのり〇侍けるを中将の朝臣

2オ

なんきゝつけてまことにさやうにふれはひぬへき
しるしやあるとたつねとふらひ侍けるくはしき
さまはえしり侍らすけにこのころめつらしき
世かたりになん人々もし侍るなるかやうの事にそ
人のためをのつからけそんなるわさに侍けれとき
こゆまことなりけりとおほしていとおほかめるゆら
にはなれ亡(たらん)をくるゝかりをしゐてたつね給ふかふ
くつけきそいとともしきにさやうならんもの
のくさはひ見いてまほしけれと名のりもの
うききはとやおもふらんさらにこそ聞えねさて〇(も)

2ウ

もてはなれたる事にはあらしらうかはしくと
かくまきれ給ふめりしほとにそこきよくすま
ぬ水にやとれる月はくもりなきやうのいかてか
あらんとほゝゑみてのたまふ中将の君もく
はしゆき(く)ゝ給へる事なれはえしもまめたゝ
す少将と侍従とはいとからしとおもひたり朝
臣やさやうのおちはをたにひろへ人わろき

名の後の世にのこらんよりはおなしかさしにて
なくさめんになてう事かあらんとろうし給
やうなりかやうの事にてそうはへはいとよき御

3オ

中のむかしよりさすかにひまありけるにまいて
中将をいたくはしたなめてわひさせ給ふつらさを
おほしあまりてなまねたしとももりきゝ給へ
かしとおほすなりけりかく聞給ふにつけてもたい
の姫君をみせたらんとき又あなつらはしからぬか
たに〇もてなされ(てもイ)〇んはやいと物きら〳〵しくかい(な)
ある所つき給へる人にてよしあしきけちめ
もけさやかにもてはやし又もてけちかろむる
ことも人にことなるおとゝなれはいかにものしとおほ
すともおほえぬさまにてこの君をさしいてたらん

3ウ

にえかろくはおほさしいときひしくもてなしてん
なとおほす夕つけゆく風いとすゝしくてかへ
りうくわかき人々はおもひたり心やすくうち〇すゝ(とけやすみイ)

まんややう〳〵かやうの中にいとはれぬへきよ
はひのほとにもなりにけりやとてにしのたいにわ
たり給へはきんたちみな御をくりにまいり給ふ
たそかれときのおほ〳〵しきにおなしなをしとも
なれはなにともわきまへられぬ〇おとゝ姫君をす
こしといて給へとてしのひて少将侍従なとゐて
まうてきたりいとかけりこまほしけにおもへる

4オ

を中将の〇しほうの人にてゐてこぬむしんなめり
かしこの人々はみなおもふ心なきならしなを〳〵し
きゝはをたにまとのうちなるほとは程にしたかひ
てゆかしくおもふへかめるわさなれはこの家のおほえ
うち〳〵のくた〳〵しきほとよりはいとよにすき
てこと〳〵しくなんいひおもひなすへかめるかた〳〵
ものすめれとさすかに人のすきこといひよらん
に〇きなしかしかくてものし給はいかてさやうな
らん人のけしきのふかさあさゝをも見んなと
さう〳〵しきまゝにねかひおもひしをほいなんか

なふ心地しけるなとさゝめき聞え給おまへにみ
たりかはしきせむさいなともうへさせ給はすなて
しこの色をとゝのへたるからのやまとのませいと
なつかしくゆひなしてさきみたれたるゆふはえい
といみしくみゆみなたちよりて心のまゝにもおり
とらぬをあかすおもひつゝやすらふいうそくとも
なりな心もちゐなともとり〳〵につけてこそめや
すけれ右の中将はましてすこししつまりて心
はつかしけさまさりたりいかにそをとつれ聞ゆや
はしたなくもなさしはなち給そなとの給ふ中

4ウ

将の君はかくよき中にもすくれてをかしけにな
まめき給へり中将をいとひ給ふこそおとゝはほ
いなけれましり物なくきら〳〵しかめる中におほ
きみたつすちにてかたくなりとにやとの給
へはきまさはといふ人も侍けるをときこえ給ふ
いてそのみさかなもてはやさ〇んさまはねかはし

5オ

からすたゝおさなきとち〇(の)むすひをきけんこゝろ
もとけすとし月へたて給ふ心むけのつらきなり
またけらうなり世のきゝみゝかろしとおもはれ
はしらすかほにてこゝにまかせ給へらんにうしろ

5ウ

めたくはありなましやなとうめき給さはかゝる御
心のへたてある御中なりけりときゝ給ふにも
おやにしられたてまつらんことのいつとなきはあ(をイ)
はれにいふせくおほす月もなき比なれはとうろ
におほとなふらまいれりなをけちかくてあつ
かはしやかゝり火こそよけれとて人めしてかゝり
火のたいひとつこなたにとめすをかしけなる
和琴のあるひきよせ給てかきならし給へは
りちにいとよくしらへられたりねもいとよく
なれはすこしひき給てかやうの事は御心にいらぬ

6オ

すちにやと月ころおもひおとし聞えけるかな
秋の夜の月かけすゝしきほといとおくふかくは
あらて虫のこゑにかき〇(なゝし)あはせたるほとけちかく
いまめかしき物の音なりこと〳〵しきしらへもて
なししとけなしやこの物よさなからおほくの
あそひものゝ〇(ね)はうしをとゝのへたるなんいとかし
こきやまとことゝはかなく見せてきはもなく
しをきたる事なりひろくことくにのことを
しらぬ女のためとなんおほゆるおなしくは心とゝ
めて物なとにかきあはせてならひ給へふかき心

6ウ

とてなにはかりもあらすなから又まことにひきう
ることはかたきにやあらんたゝいまはこのうちの
おとゝになすらふ人なしかしたゝはかなきおなし
すかゝきの音(おとて)によろつのものゝねこもりかよひて
いふかたもなくこそひゝきのほれとかたり給へは
ほの〳〵心えていかてとおほす事なれはいとゝい
ふかしくてこのわたりにてさりぬへき御あそひの
おりなとにきゝ侍なんやあやしき山かつなとの中
にもまねふものあまた侍なる事なれはをしなへ

て心やすくやとこそ思給へつれさはすくれたるは

7オ

さまことにや侍らんとゆかしけにせちに心にいれ
ておもひ給へれはさかしあつまとそ名もたちく
たりたるやうなれと御まへの御あそひにもまつ
ふんのつかさをめすはひとのくにはしらすこゝには
これを物のおやとしたるにこそあめれその中に
もおやとしつへき御手よりひきとり給へらんは
心ことなりなんかしこゝになともさるへからんおりは
ものし給なんをこのことにておしますなとあき
らかにかきならし給はんことやかたからんものゝ
しやうすはいつれの道も心やすからすのみそあ

7ウ

めるさりともつゐにはきゝ給ひてんかしとてしら
へすこしひき給ふことつひきひう〇(いとになくイ)いまめかしう
をかしこれにもまされるねやいつらんとおやの御
ゆかしさたちそひてこの事にてさへいかならん
世にさてうちとけひき給はんをきかんなと思

ゐ給へりぬきかはのせゝのやはらたといとなつ
かしううたひ給ふおやさくるつまはすこしう
ちわらひつゝわさともなくかきなし給ひたるす
かゝきのほといひしらすおもしろく聞ゆいてひき
たまへさえは人になんはちぬさうふれんはかり

8オ

こそ心のうちにまきらはす人もありけめおも
なくてかれこれにあはせつるなんよきとせち
に聞え給へとさるゐ中のくまにてほのかに京
人となのりけるふるおほきみ女のをしへ聞え
けれはひかことにもやとつゝましうて手ふれ
給はすしはしもひき給はなんきゝとる事も
やと心もとなきにこの御事によりそちかくゐさ
りよりていかなる風のふきそひてかくはひゝき
侍るそ〇(とよ)とてうちかたふき給へるさまほかけにい
とうつくしけなりわらひ給てみゝかたからぬ

8ウ

人のためには身にしむ風もふきそふかしとて

をしやり給いと心やまし人々ちかくさふらへ
はれいのたはふれこともえ聞え給はてなてしこ
をあかてもこの人々のたちさりぬるかないかて
おとゝにもこの花そのみせたてまつらん世もい
とつねなきをとおもふにいにしへも物のついて
にかたり出給へりしもたゝ今の事とそおほ
ゆるとてすこしの給ひ出たるにもいとあはれなり
　なてしこのとこなつかしき色を見はもと
のかきねを人やたつねんこのことのわつらはしさ

9オ

にこそまゆこもりも心くるしうおもひ聞ゆれと
のたまふ君うちなけきて
　山かつのかきほにおひしなてしこのもとの
ねさしをたれかたつねんはかなけに聞えなし給
へるさまけにいとなつかしくわかやかなりこさら
ましかはとうちすし給ていとゝしき御こゝろ
はくるしきまてなをえしのひはつましうお
ほさるわたり給ふ事もあまりうちしきり人

のみたてまつりとかめつへきほとは心のおにゝ
おほしとゝめてさるへきことをしいて御

9ウ

ふみのかよはぬおりなしたゝこの御事のみ
あけくれ御こゝろはかゝりたりなそかくあいな
きわさをしてやすからぬものおもひをすらんさ
おもはしとて心のまゝにもあらはよの人のそし
りいはんことのかる〳〵しさわかためをはさる
物にてこの人の御ためいとおしかるへしかきり
なき心さしといふとも春のうへの御おほえにな
らふはかりはわか御心なからえあるましくお
ほししりたりさてそのおとりのつらにてはなに
はかりかはあらんわか身ひとつこそ人よりはこと

10オ

なれ見ん人のあまたか中にかゝつらはんすゑ
にてはなにのおほえかはたけからんことなる事
なき納言のきはのふた心なくておもはんにはを
とりぬへき事そとみつからおほしるに

いといとおしくて宮大将なとにやゆるしてまし
さてもてはなれいさなひとりてはおもひたえなん
やいふかひなきにてもさもしてんとおほすおり
もありされとわたり給て御かたちをみたまひ
いまは御ことをしへたてまつり給にさへことつけ
てちかやかになれより給ひ姫君もはしめこそ

10ウ

むくつけくうたてともおもひ給しかかくても
なたらかにうしろめたき心はあらさりけりと
やう〳〵めなれていとしもうとみ聞え給はす
さるへき御いらへもなれ〳〵しからぬほとにき
こえかはしなとして見るまゝにいとあいきやう
つきかほりまさり給へれはなをさてもえす
くしやるましうおほしかへすさは又さてこゝな
からかしつきすへてさるへきおり〳〵にはかな
くうちしのひ物をも聞えてなくさみなんや
かくまた世なれぬほとのわつらはしさこそこゝろ

11オ

くるしくはありけれをのつからせきもりつよく
とも物の心しりそめいとほしきおもひなくて
わか心もおもひいりなはしけくともさはらし
かしとおほしよるもいとけしからぬ御心ことなりや
いよ〳〵心やすからすおもひわたらんも心くるしからん
なのめにおもひすくさん事のとさまかうさま
にかたきそよつかすむつかしき御かたらひなり
ける内のおほとのはこの今の御むすめの事を
とのゝ人もゆるさすかろめいひよにもほきたる
事とそしりきこゆときゝ給ふに少将のことの

11ウ

ついてにおほきおとゝのさることやととひ給し
事かたり聞ゆれはわらひ給てさかしかしこに
こそはとしころをとにも聞えぬ山かつのこむかへと
り出てものめかしたつれおさ〳〵人のうへもとき給
はぬおとゝの○あやしくいこのわたりの事はみゝとゝめてそおと
しめ給ふやこれそおほえある心地しけるとの
たまふ少将のかのにしのたいにすへ給へる人はいと

こともなきけはひみゆるわたりになん侍なる兵部
卿宮なといたう心とゝめての給ひわつらふとか(とイ)
おほろけにはあらしとなん人々をしはかり侍め

12オ

ると申給へはいてそれはかのおとゝの御むすめ
とおもふはかりのおほえのいといみしきそ人の
心みなさのみ(のみイ)こそある世なめれかならすさしも
すくれしひと〳〵しきほとならはとしころ聞え
なましあたらおとゝのちりもつかすこの世にすき
給へる御身のおほえありさまにおもたゝしきは
らにむすめかしつきてけにきすなからんと思
やりめてたきかものし給はねはおほかた〇(無イ)子のすく
なくて心もとなきなめりかしをとりはらなれと
あかしのおもとのうみいてたるはしもさる世になき

12ウ

すくせにてあるやうあらんとおほゆかしその
いまひめ君はようせすはしちの御こにもあらし
かしさすかにいとけしきある所つき給へる人

にてもてない給ふならんといひおとし給さて
いかゝさためらるなるみここそまつはしえ給はん
もとよりとりわきて御中もよし人からも
きやうさくなる御あはひともならんかしなとの
給てはなを姫君の御ことをあかすくちおしく
かやうに心にくゝもてなしていかにしなさんと
やすからすいふかしからせまし物をとねたけれ

13オ

はくらゐさはかりと見さらんかきりはゆるし聞え
かたくおほすなりけりおとゝなともねんころに
くちいれかへさひ給はんにこそはまくるやうにて
もなひかめとおほすにおとこかたはさらにいられ
聞え給はす心やましくなんとかくおほしめくら
すまゝにゆくりもなくかるらかにはひわたり
給へり少将も御ともにまいり給ひめ君はひるね
し給へるほとなりうすものゝひとへをき給ひ
てふし給へるさまあつかはしくはみえすいとらう
たけにさゝやかなりすき給へるはたつきなと

いとうつくし〇(をイ)けなる手つきしてあふきを
も給へ〇(りけ)るなからかいなを枕にてうちやられたる
御くしのほといとなかくこちたくはあらねといと
をかしきすゑつきなり人々〇(も)物のうしろによ
りふしつゝうちやすみたれはふともおとろき給
はすあふきをならし給へるになに心もなく見
あけ給へるまみらうたけにてつらつきあか
めるもおやの御めにはうつくしうのみみゆうた
たねはいさめ聞ゆる物をなとかいと物はかな
きさまにてはおほとのこもりける人々もちかく

13ウ

さふらはてあやしや女は身をつねに心つかひして
まもりたらんなむよかるへき心やすくうちす
てさまにもてなしたるしなゝき事なりさり
とていとさかしく身かためてふとうのたらに
よみいんつくりゐたらんもにくしうつゝの人にも
あまりけとをく物へたてかましきなとけたか

14オ

きやうとても人にくゝ心うつくしうはあらぬ
わさなりおほきおとゝのきさきかねのひめきみ
ならはし給ふなるをしへはよろつの事にかよ
はしなたらめてこと〳〵しきゆへもつけしたと

14ウ

たとしくおほめくこともあらしとゆるゝかにこそ
をきて給ふなれけにさもある事なれと人
として心にもするわさにもたてゝなひくかたは
かたとある物なれはおひいて給ふさまあらん
かしこの君のひとゝなり宮つかへにいたしたて
給はん世のけしきこそいとゆかしけれなとの給
ておもふやうに見たてまつらんとおもひしすちは
たかふやうになりにたる御身なれといかて人わら
はれならすしなしたてまつらんとなん人のうへの
さま〳〵なるをきくことにおもひみたれ侍こゝろ

15オ

みことにねんころからん人のねきことになしは
しなひき給ひそおもふさま侍りなといとらう

たしとおもひつゝ聞えたまふむかしはなに事も
ふかくもおもひしらて中〳〵さしあたりていとおし
かりしことのさはきにもおもなくてみえたてまつり
けるよと今そおもひ出るにむねふたかりてい
みしうはつかしき・大宮よりもつねにおほつか
なきことをうらみ聞え給へとかくの給ふかつゝ
ましくてえわたりみたてまつり給はすおとゝこ
のきたのたいの今きみをいかにせんさかしらに

15ウ

むかへゐてきて人かくそしるとてかへしをくらんも
いとかろ〳〵しく物くるをしきやうなりかくてこ
めをきたれはまことにかしつくへきこゝろある
かと人のいひなすなるもねたし女御の御かたな
とにましらはせてさるをこの物にしないてんひ
とのいとかたはなるものにいひおとすなるかたち
はたいとさいふはかりやはあるなとおほして女
御の君にかの人まいらせん見くるしからん事な
とはおひしらへる女房なとしてつゝますいひをしへ
させたまひて御らんせよわかき人々のことくさ

16オ

にはなわらはせさせ給そうたてあはつけきやう
なりとわらひつゝ聞え給ふなとかいとさことの
ほかには侍らん中将なとのいとになくおもひ侍り
けんかねことにたへすといふはかりにこそは侍らめ
かくのたまひさはくをはしたなくおもはるゝにも
かたへはかゝやかしきにやといとはつかしけに〇て聞え
させ給ふこの御ありさまはこまかにをかしけに
はなくていとあてにすみたる物のなつかしき
さまそひておもしろきむめの花のひらけさし
たるあさほらけおほえてのこりおほかりけにほゝ

16ウ

ゑみ給へるそ人にことなりけるとみたてまつり給
中将のいとさいへと心わかきたとりすくなさに
なと申給ふもいとをしけなる人の御おほえかな
やかてこの御かたのたよりにたゝすみおはして
のそき給へはすたれたかやかにをしはりて五せち

の君とてされたるわか人のあるとすくろくをそ
うち給ふてをいとせちにをしもみてせうさい〳〵
とこふこゑそいとしたときやあなうたてとお
ほして御ともの人のさきをふをもてかきせいし
たまひてなをつま戸のほそめなるよりさうし

のあきたるを見いれたまふこの人もはたけし
きはやれる御かへしや〳〵ととうをひねりて
とみにもうちいてす中におもひはありやすらん
いとあさえたるさまともしたりかたちはひちゝ
かにあいきやうつきたるさましてかみうるはし
くつみかろけなるをひたいの〇ちかやかなると
こゑのあはつけまとにそこなはれたるなめり
とりたてゝよしとはなけれとこと人とあらかふ
へくもあらすかゝみにおもひあはせられ給
にいとすくせ心つきなし・かくてものし給ふは
つきなくうゑ〳〵しくなとやある事しけ

17オ

17ウ

くのみありて〇まうてすやとの給へは・れいの
したとにてかくてさふらふはなにのものおもひ
か侍らんとしころおほつかなくゆかしく思ひき
こえさせし御かほつねにえみたてまつらぬはかり
こそてうたぬ心地し侍れと聞え給・けにみに身に
ちかくつかふ人もおさ〳〵なきにさやうにても見
ならしたてまつらんとかねてはおもひしかとえ
さしもあるましきわさなりけりなへてのつ
かうまつり人こそとあるもかゝるもをのつからた

ちましらひて人のみゝをもめをもかならす
しもとゝめぬ物なれは心やす〇かめれそれたに
その人のむすめかの人のこなとしらるゝきは
になれはおやはらからのおもてふせなるたくひ
おほかめりましてとの給ひさしつる御けし
きのはつかしきも見しらす・なにかそはこと〳〵
しく思給へてましらひ侍らはこそ所せから
めおほみおほつほとりにもつかうまつり侍なん

18オ

と聞えたまへは・えねんし給はてうちわらひ
給てにつかはしからぬやくなゝりかくたまさかに

18ウ

あへるおやのけうせんの心あらはこのもの
のたまふこゑをすこしのとめてきかせたまへ
さらはいのちものひなんかしとおこめいたまへる
おとゝにてほゝゑみてのたまふ・したのほんしやう
にこそは侍らめおさなく侍し時たにこそはゝ
のつねにくるしかりをしへ侍りしめうほうし
のへたう大とこのうふ屋に侍りたうひしけに
いかてこのしたとさやめ侍らんとおもひさはき
たるもいとけうやうの心ふかくあはれなりと
見たまふ・そのけちかくいりたち〇けん大とここそ

19オ

あちきなかりけれたゝそのつみのむくひなゝ
りをしことともりとそ大そうそしりたる
つみにもかそへたるかしとのたまひてこなから
はつかしくおはする御さまに見えたてまつらん

こそはつかしけれいかにさためてかくあやし
きけはひもたつねすむかへよせけんとおほし
人々もあまた見つきいひちらさん事とお
もひかへし給ふ物から・女御ゆさとに物し
給ふとき〳〵わたりまいりて人のありさま
なとも見ならひ給へかしことなる事なき

19ウ

人もをのつから人にましらひさるかたにな
れはさてもありぬかしさる心して見えた
てまつり給(イ)なんやとのたまへは・いとうれしき
事にこそ侍なれたゝいかても〳〵御かた〳〵に
かすまへしろしめされんことをなんねてもさ
めてもとしころなにことをおもひ給へつるに
もあらす御ゆるしたに侍らはみつをくみい
たゝきてもつかうまつりなんといとよけに今
すこしさへつれは・いふかひなしとおほしていと
しかおりたちてたきゝひろひ給はすとも

20オ

まいり給なんたゝかのあへものにしけん法の師
たにとをくはとおこことにのたまひなすをも
しらすおなしき大臣と聞ゆる中にもいと
きよけにもの〳〵しくはなやかなるさまし
ておほろけの人みえにくき御けしきをも
見しらす・さていつか女御とのにはまいり侍らん
するときこゆれは・よろしきひなとやいふへ
からんよしこと〳〵しくはなにかはさもとおも
はれはけふにてもとのたまひすてゝわたり給
ぬよき四位五位たちのいつき聞えてうち身

20ウ

しろき給ふにもいといかめしき御いきほひな
るを見をくり聞えて・いてあなめてたのわか
おやゝかゝりけるたねなからあやしきこ家に
おひいてけることゝのたまふ五せちあまり
こと〳〵しくはつかしけにそおはするよろ
しきおやのおもひかしつかんにそたつねいて
られ給はましといふもわりなしれいの君の
人のいふことやふり給いてめさましいまはひ
とつくちにことはなませられそあるやうある
へき身にこそあめれとはらたち給かほやう

21オ

けちかくあいきやうつきてうちそほれたる
はさるかたにをかしくつみゆるされたりたゝ
いとひなひあやしきしも人の中におひ出
給へれは物いふさまもしらす・ことなるゆへな
きことはをもこゑのとやかにをししつめて
いひいたしたるはうちきくみゝことにおほえ
をかしからぬうたかたりをするもこわゑ(わイ)つかひ
つき〳〵しうて残りおもはせもとすゑお
しみたるさまにてうちすんしたるはふかき
すちおもひえぬほとのうちきゝにはをかし
かなりとみゝもとまるかしいと心ふかく
よしあることをいひゐたりともよろしき

21ウ

心ちあらんときこゆへくもあらす・あはつけ
きこわさまにのたまひいつることはこは
こはしうこと葉たみてわかまゝにほこり
ならひたるめのとのふところにならひたるさま
にもてなしていとあやしきにやつるゝなり
けりいといふかひなきにはあらすみそもしあ
まりもとすゑあはぬうたうちつゝけなと
したまふ・さて女御とのに〇(まいれと)のたまひつるをしふ〳〵

22オ

なるさまならはものしくもこそおほせよさり
まうてんおとゝの君天下におほすともこの
御かた〳〵のすけなくし給はんにはとのゝうち
にはたてりなんやとのたまふ御おほえのほとい
とかろらかなりや・まつ御ふみたてまつり給ふ
あしかきのまちかきほとにはさふらひなから今
まてかけふむはかりのしるしも侍らぬはなこそ
のせきをやすへさせ給ふ(へ)らんとなんしらねと
もむさし野といへはかしこけれとともあなかし

こ〳〵やとてんかちにてうらにはまことやくれ
にもまいりこんとおもひ給へたつはいとふには
ゆるにやいて〳〵あやしきはみなせ川にを
とて又はしにかくそ
　草わかみひたちのうらのいかゝさきいかて
あひみんたこのうら波おほかはみつのとあをき
しきしひとかさねにいとさうかちにいかれるて
のそのすちとも見えすたゝよひたるかきさま
しも〇(レイ)なかにわりなくゆへはめりくたりのほと
はしさまにすちかひてたうれぬへくみゆる
をうちゑみつゝさすかにいとほそくちいさく

22ウ

まきむすひてなてしこの花につけたりひ
すましわらはゝしもいとなれてきよけなる
いままいりなりけり女御の御かたのたいはん
所によりてこれまいらせ給へといふしもつかへ
見しりて北のたいにさふらふわらはなりけり

23オ

とて御ふみとりいる大輔の君といふもて
まいりてひきときて御覧せさす女御ほゝゑ
みてうちをかせ給へるを中納言の君といふ
いとちかくさふらひてそは〳〵見けりいと今
めかしき御ふみのけしきにも侍るかなとゆ

かしけにおもひたれはさうのもしはえみし
らねはにやあらんもとすゑなくも見ゆる
かなとてたまへり・かへりことかくゆへ〳〵しか
らすはわろしとやおもひおとされんやかて
かき給へとゆつり給ふもていてゝこそあらね
わかき人々は物をかしくてみなうちわらひぬ
御かへりこへはをかしき事のすちにのみまと
はれて侍めれは聞えさせにくゝこそせんし
かきめきてはいとおしからんとてたゝ御ふみ
めきてかくちかきしるしなきおほつかなさは

23ウ

うらめしく

24オ

ひたちなるするかのうみのすまのうらに
なみたちいてよはこさきのまつとかきてよ
み聞ゆれはあなうたてまことに身つからのに
もこそいひなせとかたはらいたけにおほしたれ
とそれはきかん人わきまへ侍りなんとてをし
つゝみていたしつ・御かた見てをかしの御くち
つきやまつとの給へるをとていとあまへた
るたきものゝかをかへす〳〵たきしめゐ給へ
りへにといふものいとあからかにかいつけて

かみけつりつくろひ給へるさるかたににき
はゝしくあいきやうつきたり御たいめんのほと
さしすくし〇たる事ともあらんかし

24ウ

25オ

（かゝり火）

このころ世の人のことくさにうちの大いと
の、いまひめきみとことにふれつゝいひち
らすを源しのおとゝきこしめしてとも〇(あれイ)かく
もあれ人みるましくてこもりゐたらむ
女こをなをさりのかことにてもさはかり
に物めかしいてゝかく人にみせいひつたへ
らるゝこそ心えぬ事なれいときは〳〵し
くものし給ふあまりふ(にイ)かき心をもたつね
すもていてゝ心にもかなはねはかくはしたな
きなるへしよろつのこともてなしからにこ

1オ

そなたらかなるものなめれといとをしかりた
まふかゝるにつけてもけによくこそお(とイ)や
ときこえなからもとしころの御心をしり
きこえすなれたてまつらましかははちかまし
き事やあらましとたいのひめきみお(はイ)ほ
しゝるを右近もいとよくきこゑしらせ
けりにくき御心こそゝひたれとさりとて
御心のまゝにをしたちてなともてなし
たまはすいとゝふかき御心のみまさりたま
へはやう〳〵なつかしうゝちとけきこえ給あき

1ウ

になりぬはつかせすゝしくふきいてゝせ
こかころもゝうらさひしき心地したまふ
にしのひかねつゝいとしは〳〵わたりたまひ
ておはしましくらし御ことなともならは
しきこえ給五六日のゆふつく夜はとくい
りてすこしくもかくる(れるイ)ゝけしきおきのを
ともやう〳〵あはれなるほとになりにけり御
ことをまくらにてもろともにそひふしたま
へりかゝるたくひあらむやとうちなけきか
ちにて夜ふかしたまふも人のとかめたて

2オ

まつらむ事をおほせはわたり給なむとて
御まへのかゝり火のすこしきえかたなるを
御ともなる右近のたいふをめしてともし
つけさせたまふいとすゝしけなるやり水
のほとりにけしき〇ひろこりたしたるま
ゆみの木のしたにうちまつおとろくしか
らぬほとにをきてさしゝりそきてとも
したれは御前のかたはいとすゝしくを
かしきほとなるひかりに女の御ありさまみる
にかひあり御くしのてあたりなといとひやゝ

2ウ

かに丁あてはかなる心地してうちとけぬ
さまにものをつゝましとおほしたるけ
しきいとらうたけなりかへりうくおほし
やすらふたえす人候てともしつけよ夏
の月なきほとはにはのひかりなきいと物
むつかしくおほつかなしやとのたまふ
かゝり火にたちそふこひのけふりこそ

よにはたえせぬほのをなりけれいつまて
とかやふすふるならてもくるしきしたも
えなりやときこえたまふ女きみあやしの

3オ

有さまやとおほすに
ゆくゑなきそらにけちてよかゝりひ
のたよりにたくふけふりとならは人のあ
やしとおもひ侍らむ事とわひたまへはく
はやとて〇ひむかしのたいのかたにおもしろき
ふえのね笙にふきあはせた〇り中将
のれいのあたりはなれぬとちあそふにそあ
りける頭中将にこそあ〇れいとわさともふ
きなるねかなとてたちとまりたまふ御
せうそこゝなたになむいとかけすゝしきか

3ウ

かり火にとゝめられてものするとのたまへ
れはうちつれて三人まいりたまふ里風
のをとあきになりにけりときこえつる

ふえのねにしのはれてなむとて御こと
ひきいてゝなつかしきほとにひき給源中将
ははイ本無んしきてうにいとをもしろくふきたり
頭中将はイ無心つかひしていたしたてかたうす
をそしとあれは弁少将ひやうしうちいてゝ
しのひやかにうたふこゑすゝむしにまか
ひたりふたかへりはかりうたはせたまひて

御ことは中将にゆつらせたまひつけにか
のちゝおとゝの御つまをとにをさ〳〵おとらす
はなやかにおもしろしみすのうちにものゝね
きゝわく人ものしたまふらむかしこよひは
さかつきなと心してをさかりすきたる人は
ゑひなきのついてにしのはぬこともこそ
とのたまへはひめ君もけにあはれとき
きたまふたえせぬ中の御ちきりをろかな
るましき物なれはにやこの君たちを
人しれすめにもみゝにもとゝめたまへと

4オ

さたに思よらすこの中将は心のかきり
つくしておもふすちにそかゝるつゑて
にもえしのひはつましき心地すれとさ
まよくもてなしておさ〳〵心とけてもか
きわたさす

4ウ

5オ

（野わき）

中宮の御まへに秋のはなをうへさせ給へる事

つねのとしよりも見所おほく色草をつくし
てよしあるくろきあかきのませをゆひませ
つゝおなしき花の枝さしすかた朝夕露の
光もよのつねならす玉かとかゝやきて作り
わたせる野への色を見るにはた春の山も
わすられてすゝしうおもしろく心もあく
かるゝやうなり・春秋のあらそひにむかし
より秋に心をよする人はかすまさり
けるをなたゝる春の御まへの花園にこゝろ

1オ

よせし人々又ひきかへしうつろふけしき世の
ありさまにたりこれを御らんしつきて
里ゐし給程御あそひなともあらまほし
けれと八月は故前坊の御き月なれは心もと

なくおほしつゝあけくるゝに此はなの色ま
さるけしきともを御らんするに野分れい
のとしよりもおとろ〳〵しく空の色かはり
て吹いつ花とものしほるゝをいとさしも
おもひしまぬ人たにあなわりなとおもひさ
はかるゝをまして草むらの露の玉のを

1ウ

みたるゝまゝに御心まとひもしぬへくおほ
したりおほふはかりの袖は秋の空にしも
こそほしけなりけれ暮行まゝに物も見え
す吹まよはしていとむくつけゝれはみかうし
なとまいりぬるにうしろめたくいみしと花
のうへをおほしなけく南のおとゝにもせん
さいつくろはせ給けるおりしもかくふき
出てもとあらのこ萩はしたなくまちえ
たる風のけしきなりおれかへり露もと
まるましう吹ちらすをすこしはしちかく

2オ

て見給・おとゝは姫君の御かたにおはしまし
程に中将のきみまいり給てひんかしの
わたとのゝこさうしのかみよりつま戸
のあきたるひまをなに心もなくみいれ
給へるに女房のあまた見ゆれは立とまりて
をともせて見る御屏風も風のいたくふき
けれはをしたゝみよせたるに見とをしあらは
なるひさしのおましにゐ給へる人物に
まきるへくもあらすけたかくきよらに
さとうち匂ふ心ちして春の明ほのゝ霞の
間よりおもしろきかは桜の咲みたれたる
を見る心ちすあちきなく見たてまつる
わかかほにもうつりくるやうにあいきやうは
にほひちりて又なくめつらしき人の御さま
なりみすの吹あけらるゝを人々をさへ
ていかにしたるにかあらんうちわらひ給へる
いといみしく見ゆ花ともを心くるしかりて

2ウ

え見すてゝ入給はす御まへなる人々もさ
まさまに物きよけなるすかた共は見
わたさるれとめうつるへくもあらすおとゝの
いとけとをくはるかにもてなし給へるはかく
見る人たゝにはえおもふましき御ありさ
まをいたりふかき御心にてもしかゝる事
もやとおほすなりけりとおもふにけはひ
おそろしうて立さるにそにしの御方
よりうちのみさうし引あけてわたり給
いとうたてあはたゝしき風なめりみ
かうしおろしてよおのこともあるらんを
あらはにもこそあれと聞え給を又よりて
見れは物きこえておとゝもほゝゑみて
そ見たてまつり給おやともおほえす若く
きよけになまめきていみしき御かたちの

3オ

3ウ

さかり也女もねひとゝのひあかぬ事なき
御さま共なるを見るに身にしむはかり
おほゆれと此わたとのゝひんかしのかうし
も吹はなちてたてる所のあらはになれは
おそろしうて立のきぬ今まいれるやうに
うちこはつくりてすのこのかたにあゆみ出
給へれはされはよあらはなりつらんとてか
のつま戸のあきたりけるよと今そ〇見とかめ

給ふ・としころかゝる事の露なかりつるを・風
こそけに岩ほも吹あけつへき物なりけれ
さはかりの御心ともをさはかしてめつらしく
うれしきめを見つるかなとおほゆ・人々まい
りていといかめしう吹ぬへき風には侍り
うしとらの方よりふき侍れは此御まへはのと
けきなりむまはのおとゝ南のつり殿なと
はあやうけになんとてとかく事おこなひ
のゝしる・中将はいつこよりものしつるそ

4オ

三条の宮に侍りつるを風いたく吹ぬへしと

人々〇の申つれはおほつかなさになんまいりて
侍つるかしこにはまして心ほそく風の音〇をも
今はかへりてわかき子のやうにをち給めれは
心くるしさにまかて侍なんと申給へはけにはや
まうて給ひね老もていきて又わかうなる
事世にあるましき事なれとけにさのみこそ
あれなとあはれかり聞え給て・かくさはか
しけに侍めるを此朝臣さふらへはと思ひ給へ
ゆつりてなんと御せうそこ聞え給ふみち
すからいりもみする風なれとうるはしく物し

給君にて三条の宮と六条院とにまいりて
御らんせられ給はぬ日なし内の御物いみなと
にえさらすこもり給へき日より外はいそ
かしきおほやけ事せちゑなとのいとまいるへ
く事しけきにあはせてもまつ此院にまい

4ウ

5オ

り宮よりそ出給ひけれはましてけふ
かゝる空のけしきにより風のさきにあくか
れありき給もあはれに見ゆ・宮いとうれしう
たのもしと待うけ給てこゝらのよはひに
またかくさはかしき野分にこそあはさり

5ウ

つれとたゝわなゝきにわなゝき給おほき
なる木の枝なとのおるゝをともいとうたて
ありおとゝのかはらさへ残るましく吹ちらす
にかくてものし給へる事とかつはのたまふ
そこら所せかりし御いきほひのしつまりて
此君をたのもし人におほしたるつねなき
世なり今もおほかたのおほえのうすらき給
事はなけれと内のおほいとのゝ御けはひは
中〳〵すこしうとくそありける中将よもす
からあらき風の音にもすゝろに物あはれなり

6オ

心にかけて恋しとおもふ人の御事はさし
をかれてありつる御おもかけのわすられぬを
こはいかにおほゆる心そあるましき思ひも
こそそへいとおそろしき事とみつから
おもひまきらはしこと事に思ひうつれと
猶ふとおほえつゝきしかた行末ありかたくも
物し給けるかなかゝる御なからひにいかて
ひんかしの御方さるものゝかすにてたちな
らひ給つらんたとしへなかりけりやあないと
おしとおほゆおとゝの御心はへをありかたしと

6ウ

おもひしり給人からのいとまめやかなれは
にけなさをおもひよらねとさやうならん
人をこそおなしくは見てあかしくらさめかき
りあらん命の程も今すこしはかならすの
ひなんかしとおもひつゝけらる・あかつき方に
風すこししめりてむら雨のやうにふりいつ
六条院にははなれたる屋ともたふれたり
なと人々申風の吹まふ程ひろくそこら

高き心ちする院に人々はたおはします
おとゝのあたりにこそしけけれひんかしの

7オ

町なとは人すくなにおほされつらんとおとろ
き給てまたほの〳〵とするにまいり給ふ道
の程よこさま雨いとひやゝかにふりいる空
のけしきもすこきにあやしくあくかれ
たる心ちして何事そや又我心に思ひ
くはゝれるよとおもひいつれはいとにけなき
事なりけりあな物くるをしととさまかう
さまにおもひつゝひんかしの御方にまつまう
て給へれはをちこうしておはしけるに
とかく聞えなくさめて人めして所〳〵

7ウ

つくろはすへきよしなといひをきて
南のおとゝにまいり給へれはまたみかうしも
まいらすおはしますにあたれるかうらんに
をしかゝりて見わたせは山の木共もふき
なひかして枝ともおほくおれふしたり
草むらはさらにもいはすひはたかはら所々
のたてしとみすいかいなとやうのものみた
りかはし日のはつかにさし出たるにうれへ
かほなる庭の露きら〳〵として空はいと
すこく霧わたれるにそこはかとなく涙

8オ

のおつるをゝしのこひかくして打しはふき
給へれは中将のこはつくるにそあなる夜は
またふかゝらんはとておき給なり何事にか
あらん聞え給こゑはせておとゝ打わらひ
給ていにしへたにしらせたてまつらすなり
にしあかつきのわかれよ今ならひ給はんに
心くるしからんとてとはかりかたらひ〇給ふ
けはひともいとおかし女の御いらへは聞えね
とほの〳〵かやうにきこえたはふれ給こと
のはのおもむきにゆるひなき御なからひ

8ウ

かなときゝゐ給へり・みかうしを御てつから
引あけ給へはけちかきかたはらいたさに
立のきてさふらひ給いかにそよへ宮は
まちよろこひ給ひきやしかはかなき事に
つけてもなみたもろに物し給へはいと
ふひんにこそ侍れと申給へはわらひ給て
いまいくはくもおはせしまめやかにつかうま
つり見えたてまつれ内のおとゝはこまかに
しもあるましうこそうれへ給ひしか人から
あやしうはなやかにをゝしきかたにより

9オ

ておやなとの御けうをもいかめしきかたさま
をはたてゝ人にも見おとろかさんの心あり
まことにしみてふかき所はなき人になん
物せられけるさるは心のくまおほく〇かしこき
人のすゑの世にあまるまてさえたくひな
くうるさなから人としてかくなんなき
事はかたかりけるなとの給・いとおとろ〳〵
しかりつる風に中宮にはか〳〵しきみや
つかさなとさふらひつらんやとて此君
して御せうそこ聞え給よるの風の音

9ウ

はいかゝきこしめしつらん吹またり侍しに
おこりあひ侍ていとたへかたきためらひ侍程
になんときこえ給中将おりて中のらうの
とよりとをりてまいり給朝ほらけのかたち
いとめてたくおかしけなりひんかしのたい
の南のそはにたちて御前のかたを見やり
給へはみかうしふたまはかりあけてほの
かなる朝ほらけのほとにみすまきあけて
人々ゐたりかうらんにをしかゝりつゝわかや
かなるかきりあまた見ゆ打とけたるは

10オ

いかゝはあらんさやかならぬあけくれの程色々
なるすかたはいつれともなくおかしわらはへ
おろさせ給てむしのこともに露かはせ給

なりけりしをんなてしこゆこきうすきあ
こめともに女郎花のかさみなとやうの時に
あひたるさまにて四五人はかりつれてこゝ
かしこの草むらによりて色々のこともを
もてさまよひなてしこなとのいとあはれ
けなるは枝ともとりもてまいる霧の
まよひはいとえんにそみえける吹くる

10ウ

をひ風はしをにこと／＼に匂ふかうのかほり（しうのかにことにイ）
もふれはい給へる御けはひにやといとおもひ
やりめてたく心けさうせられて立出にく
けれとしのひやかにうち音なひてあゆみ出
給へるに人々けさやかにおとろきかほには
あらねとみなすへりいりぬ御まいりのほと
なとわらはなりしにいりたちなれ給へる（にてイ）（れはイ）
女はうなともいとけうとくはあらす御せう
そこけいせさせ給て宰相の君内侍なと
けはひすれはわたくし事も忍ひやかに

11オ

かたらひ給これはたさいへとけたかくすみたる
けはひありさまを見るにもさま／＼にもの
おもひ出らる・南のおとゝにはみかうしまいり
わたしてよへ見すてかたかりし花とも
の行ゑもしらぬやうにてしほれ臥たるを
見給けり中将みはしにゐ給て御かへり聞
え給ふあらき風をもふせかせ給へくやとわか／＼
しく心ほそくおほえ侍るを今なんなくさめ
侍りぬるときこえ給へれはあやしくあえか
におはする宮なり女とちは物おそろしく

11ウ

おほしぬへかりつる夜のさまなれはけにをろか
なりともおほいてんとてやかてまいり給御
なをしなとたてまつるとてみす引あけて入
給にみしかきみき丁引よせてはつかに見ゆる
御袖くちはさにこそはあらめとおもふにむね
つふ／＼となる心ちするもうたてあれは外

さまに見やりつ・との御かゝみなと見給て
しのひて中将の朝けのすかたはきよけなりな
たゝ今はきひはななるへきほとをかたくなしからす
見ゆるも心のやみにやとてわか御かほは

12オ

ふりかたくよしと見給ふへかめりいといたう
心けさうし給て宮に見えたてまつる
ははつかしうこそあれなにはかりあらはなる
ゆへ〳〵しさも見え給はぬ人のおくゆかしく
心つかひせられ給そかしいとおほとかに女し
き物からけしきつきてそおはするやとて
出給に中将なかめいりてとみにもおとろく
ましきけしきにてゐ給へるを心とき人の
御めにはいかゝ見給ひけん立帰り女きみに
きのふ風のまきれに中将は見たてまつり

12ウ

やしてけんかのとのあきたりしによとの給
へはおもてうちあかみていかてかさはあらん
わたとのゝ方には人の音もせさりし物をと
聞え給ふ猶あやしと独こちて渡り給ぬ
みすのうちに入給ぬれは中将わたとのゝ戸
くちに人々けはひするによりて物なといひ
たはふるれとおもふ事のすち〳〵なけかしう
てれいよりもしめりてゐ給へり・こなたより
やかて北にとをりてあかしの御方を見やり
給へははか〳〵しきけいしたつ人なとも見えす

13オ

なれたるしもつかひ共そ草の中にましり
てありくわら〇(は)へなとおかしきあこめすかた
うちとけて心とゝめとりわき〇(てイ)うへ給ふ
りんたうあさかほのはいまし〇(れる)ませもみな
ちりみたれたるをとかくひきいて尋るなるへ
し・ものゝ哀におほえけるまゝにさうの
琴をかきまさくりつゝはしちかうゐ給へるに
御さきをふこゑのしけれは打とけなへは
めるすかたにこうちき引おとしてけちめ

見せたるいといたしはしのかたについゐ給

風のさはきはかりをとふらひ給てつれなく
たちかへり給〇心やましけなり

おほかたの荻の葉過る風の音もうき
身ひとつにしむ心ちしてと独こちけり・
にしのたいにはおそろしと思ひあかし給ける
名残にねすくして今そかゝみなと見給〇
けること〳〵しくさきなをひそとの給へは
ことにをともせて入給屏風なともみなたゝみ
よせものしとけなくしなしたるに日の
はなやかにさし出たるほとけさ〳〵と物きよ

13ウ

けなるさましてゐ給へりちかくゐ給てれい
の風につけてもおなしすちにむつかしう
聞えたはふれ給へは〇うたてとおもひて
かう心うけれはこそ今夜の風にもあくかれ
なまほしう侍つれとむつかり給へはいと

よくうちわらひ給て風につきてあく
かれあくかれ給はんやかる〳〵しからんさり
ともとまるかたありなんかしやう〳〵かゝる
御心むけこそそひにけれことはりやと

の給へはけに〇うち思ひまゝに聞えてける

かなとおほしてみつからもうちゐみ給へる
いとおかしき色あひつらつきなりほう
つきなといふめるやうにふくらかにてかみ
のかゝれるひま〳〵うつくしうおほゆまみ
のあまりわらゝかなるそいとしもしな
高く見えさりけるその外は露なん
つくへうもあらす・中将いとこまやかに聞え
給をいかて此御かたち見てしかなとおもひわたる
心にてすみのまの〇木丁はそひなからしと
なきをやをらひま引あけて見るにまき

14ウ

15オ

るゝ物共もとりやりたれはいとよく見ゆかく
たはふれ給けしきのしるきをあやしのわさ
やおや〇と聞えなからかくふところはなれす
物ちかゝへき程かはと目とまりぬ見やつけ
給はんとおそろしけれとあやしきに心も
おとろきてなを見れははしらかくれに
すこしそはみ給へりつるを引よせ給へる
に御くしのなみよりてはら〳〵とこほれ
かゝりたるほと女もいとむつかしうくるし〇
おもひ給へるけしきなからさすかにいとなこ

15ウ

やかなるさましてよりかゝり給へるはことと
なれ〳〵しきにこそあまれいてあなうたて
いかなる事にかあらん思ひよらぬくまなくおは
しける御心にてもとより見なれおほし
たて給はぬはかゝる御おもひそひ給へる
なめりむへなりけりやあなうとましと思ふ
心もはつかし女の御さまけにはらからといふ〇も

すこしたちのきてことはらそかしなと
おもはんはなとか心あやまりもせさらんと
おほゆきのふ見し御けはひにはけおとり

16オ

たれと見るにえまるゝさまはたちも
ならひぬへく見ゆる八重やまふきのさき
みたれたるさかりに露かゝれる夕はへそふ
と思ひいてらるゝおりにあはぬよそへとも
なれと猶うちおほゆるやうよ花はかき
りこそあれそゝけたるしへなとも〇ましる
かし人の御かたちのよきはたとへん方なき
ものなりけりおまへに人もいてこすいと
こまやかに打さゝめきかたらひきこえ給に
いかゝあらんまめたちてそたち給ふ女君

16ウ

吹みたる風のけしきに女郎花しほれし
ぬへき心ちこそすれくはしくも聞えぬに打
すんし給ふをほのきくにくきものゝおか

しけれは猶見はてまほしけれとちかかり
けりと見えたてまつらしと思て立さり
ぬ御かへり
　した露になひかましかはをみなへしあらき
風にはしほれさらましなよ竹を見給へかしなと
ひかみゝにやありけんきゝよくもあらすそ・東
の御かたへこれよりそわたり給今朝のあささむ

17オ

なるうちとけわさにや物たちなとするねひ
こたちおまへにあまたしてほそひつめく物に
わた引かけてまさくるわか人ともありいと
きよらなるくちはのうすもの今やう色のに
なくうちたるなと引ちらし給へり中将の
したかさねか御前のつほせんさいのえんもとま
りぬらんかしかく吹ちらしてんにはなに事か
せられん冷しかるへき秋なめりなとの給て何
にゝかあらんさま〳〵なる物の色ともの(のいろ)いときよ
らなれはかやうなるかたは南のうへにも

をとらすかしとおほす御なをし○花文れう(唐のイ)
を此ころつみ出したる花してはかなくそめ
出給へるいとあらまほしき色したる(り)中将に
こそかやうにてはきせ給はめわかき人のに
てめやすかめりなとやうの事を聞え給て
わたり給ぬ・むつかしきかた〳〵めくり給御とも
にありきて中将はなま心やましうかゝまほ
しき文なと目たけぬるをおもひつゝ姫君
の御方にまいり給へりまたあなたになん
おはします風におちさせ給てけさはえおき

17ウ

あかり給はさりつると御めのとそ聞ゆ(る)○物さは
かしけなりしかはとのゐもつかうまつらんと
思給へしを宮のいとも心くるしうおほいたり
しかはなんひいなのとのはいかゝおはすらんと
とひ給へは人々わらひて扇の風たに○いれは(ま)
いみしき事におほいたるをほと〳〵しくこそ

18オ

ふきみたり侍しか此御とのあつかひに
わひにて侍なとかたること〳〵しからぬ紙や
侍御つほねのすゝりと〇こ(と)ひ給へはみつしに
よりてかみ一まき御硯のふたにとりおろし

18ウ

てたてまつれはいなこれはかたはらいたしと
の給へと北のおとゝのおほえをおもふにすこし
なのめなる心ちしてかき給むらさきのうす
やうなりけり〇心(すみ)とめてをしすりふてのさ
き打見つゝこまやかにかきやすらひ給へる
さまいとよしされとあやしくさたまりてにく
きくちつきこそものし給へ
　風さはきむら雲まよふ夕にもわするゝ
まなくわすられぬ君ふきみたれたるかる
かやにつけ給へれは人々かたのゝ少将は紙の

19オ

色にこそとゝのへ侍けれときこゆさはかりの
色もおもひわかさりけりやいつこの野へのほと
りの花よなとかやうの人々にもことすくなに
見えて心とくへうもてなさすいとすく〳〵
しうけたかし又もかい給てむまのすけに
給へれはおかしきわらは又いとなれたる鬼(み)
随身なとに打さゝめきてとらするをわかき人々
たゝならすゆかしかる・わたらせ給とて人々打
そよめきき丁引なをしなとす見つる花の
かほともおもひくらへまほしくてれいは物ゆかし

19ウ

からぬ心ちにあなかちにつま戸のみすを引きて
き丁のほころひより見れは物のそはより
たゝはひわたり給ほとそふとうち見えたる人
のしけくまかへはなにのあやめも見えぬ程に
いと心もとなしうす色の御そにかみのまた
たけにははつれたるすゑの引ひろけたる
やうにていとほそくちいさきやうたいらう
たけに心くるしをとゝしはかりはたまさか
にもほの見たてまつりしに又こよなくおい

まさり給なめりかしましてさかりいかならん

20オ

とおもふかの見つるさき〳〵の桜やまふきと
いはゝこれは藤の花とやいふへからん木たかき
木よりさきかゝりて風になひきたる匂ひは
かくそあるかしとおもひよそへらるかゝる人々を
心にまかせてあけくれ見たてまつらはやさも
ありぬへきほとなからへたて〳〵の〇けさやかなる
こそつれけれなとおもふにまめ心もなまあ
くかるゝ心ちす・おは宮の御もとにもまいり給へ
れはのとやかにて御おこなひし給よろしき
わか人なとこゝにもさふらへともてなしけはひ

20ウ

さうそく共もさかりなるあたりにはにるへくも
あらすかたちよきあま君たちの墨染に
やつれたるそ中〳〵かゝる所につけてはさる
かたにてあはれなりけるうちのおとゝもまいり
給へるに御となあふらなとまいりてのとやかに

御物かたりなと聞え給姫君をひさしく見
たてまつらぬかあさましき事とてたゝなき
になき給ふ今この心のほとにまいらせん
心つから物おもはしけにてくちおしうおとろへ
にてなん侍める女ここそよくいはゝもち侍る

21オ

ましきものなりけれとあるにつけても心の
みなんつくされ侍けるなと猶心とけす思ひ
をきたるけしきしての給へは心うくてせち
にも聞え給はすそのついてに〇いとふてうなる
むすめまうけ侍てもてわつらひ侍ぬと
うれへきこえ給てわらひ給宮いてあな
あやしむすめといふ名はしてさかなかなる
やうやあるとの給へはそれなん見くるしき
事になん侍いかて御らんせさせんときこえ給
とや

21ウ

（ふちはかま）

内侍のかみの御みやつかへの事をたれも〳〵そゝ
のかし給もいかならんおやと思ひきこゆる人の御
心たにうちとくましき世なりけれはましてさ
やうのましらひにつけて心よりほかにひんなきこ
ともあらは中宮も女御もかた〳〵につけて心をき
給はゝはしたなからむに我身はかくはかなきさまに
ていつかたにもふかく思ひとゝめられたてまつる
ほともなくあさきおほえにてたゝならすおもひい
ひいかて人わらへなるさまに見きゝなさむとう
けひ給人〳〵もおほくとかくにつけてやすから

1オ

ぬ事のみありぬへきをおほしるましきほとにし
あらねはさま〳〵におもほしみたれ人しれす物
なけかしさりとてかゝるありさまもあしき事は
なけれとこのおとゝのむつかしう心つきなきも
いかなるつゐてにかはもてはなれて人のをしはかる
へかめるすちを心きよくもありはつへきまことの
ちゝおとゝもこのとのゝおほさん所もはゝかり給て
うけはりてとりはなちけさやき給へき事
にもあらねはなをとてもかくても見くるしう
かけ〳〵しきありさまにて心をなやまし人に

1ウ

もてさはかるへき身なめりと中〳〵このおやた
つねきこえ給てのちはことにはゝかり給けし
きもなきおとゝの君の御もてなしをとりくはへつゝ
人しれすなんなけかしかりける思ふ事をまほな
らすともかたはしにてもうちかすめつへき女お
やもおはせすいつかたも〳〵いとはつかしけにうる
はしき御さまともにはなに事をかはさなんかく
なんともきこえわき給はん世の人にゝぬ身のあり
さまをうちなかめつゝ夕暮の空あはれけなるけ
しきをはしちかくて見いたし給へるさまいと

2オ

をかしうすきにひ色の御そなつかしきほとにやつれ
てれいにかはりたる色あひにしもかたちはいと
はなやかにもてはやされておはするをおまへなる人〳〵
はうちゑみて見たてまつるに宰相中将おなし色
のいますこしこまやかなるなをしすかたにてゑい
まき給へるしも又いとなまめかしうきよらにて
おはしたりはしめより物まめやかに心よせ
聞えたまへはもてはなれてうと〳〵しきさま
にはもてなし給はさりしならひにいまあらさ
りけりとてこよなくかはらむもうたてあれはな

2ウ

をみすにき丁そへたる御たいめんは人つてならて
ありけりとのの御せうそこにて内よりおほせこ
とあるさまやかてこの君のうけ給はり給へるなり
けり御返おほとかなる物からいとめやすく聞え
なし給けはひのらう〳〵しくなつかしきにつけて
もかの野わきのあしたの御あさかほは心にかゝり
て恋しきをうたてあるすちに思ひしをきゝあ

きらめて後はなをもあらぬ心ちそひてこの宮つ
かへをおほかたにしもおほしはなたしかしさはかり
見所ある御あはひともにてをかしきさまなる事

3オ

のわつらはしきはたかならすいてきなんかしと思
ふにたゝならすむねふたかる心ちすれとつれな
くすくよかにて人にきかすましと侍つる事を
きこえさせんといかゝ侍へきとけしきたてはちかくさ
ふらふ人もすこししりそきつゝみき丁のうしろ
なとにそはみあへりそらせうそこをつき〳〵しうと
りつゝけてこまやかに聞え給ふうへの御けしき
のたゝならぬすちをさる御心し給へなとやうのすち
なりいらへたまはん事もなくてたゝうちなけき給
へるほとしのひやかにうつくしういとなつかしきにな

3ウ

をえしのふましく御ふくもこの月にはぬかせ給へき
を日つゐてなんよろしからさりける十三日にはかは
らへいてさせ給ふへきよしの給はせつるなにかし

も御ともにさふらふへくなん思給ふるときこえた
まへはたくひ給はんもこと〳〵しきやうにや侍
らんしのひやかにてこそよく侍らめとの給ふこの
御ふくなとのおもしきさまを人にあまねくし
らせしとおもむけたまへるけしきいとらうあり
中将もらさしとつゝませ給ふらんこそ心うけれ
しのひかたく思ふ給へらるゝかたみなれはぬき

4オ

すて侍らんこともいと物うく侍る物をさてもあや
しうもてはなれぬことの又心えかたきにこそ侍れ
この御あらはし衣の色なくはえこそ思ふ給へわ
くましかりけれはの給へは何事も思ひわかぬ心
にはましてともかくもおもふ給へたとられ侍らね
とかゝる色こそあやしく物あはれなるわさに侍け
れとてれいよりもしめりたる御けしきいとらう
たけにをかしかゝるつゐてにとや思ひよりけん
らにの花にいとおもしろきをもたまへりける
をみすのつまよりさしいれてこれも御らんすへ

4ウ

きゆへはありけりとてとみにもゆるさてもた
まへれはうつたへに思ひもよらてとり給御袖をひ
きうこかしたり
おなし野の露にやつるゝ藤はかまあはれはか
けよかことはかりもみちのはてもなるとかやいと心
つきなくうたてなりぬれと見しらぬさまに
やをらひきいりて
尋ぬるにはるけき野への露ならはうすむら
さきやかことならましかやうにてきこゆるよりふ
かきゆへはいかゝとの給へはすこしうちわらひてあさ

5オ

きもふかきもおほしわくかたは侍なんと思給ふる
まめやかにはいとかたしけなきすちをおもひし
りなからてしつめ侍らぬ心のうちをいかてかしろしめさ
るへきなか〳〵おほしうとまんかわひしさにいみし
くこめ侍をいまはたおなしと思給へわひてなん
頭中将のけしきは御らんししりきや人のうへになと

おもひ侍けん身にてこそいとおこかましうかつはお
もふ給へしられけれ中々かの君は思ひさましてつ
ゐに御あたりはなるましきたのみおもひなくさめ
たるけしきなと見侍もいとうらやましくねた

5ウ

きにあはれとたにおほしをけよなときこえしら
せ給事おほかれとかたはらいたけれはかゝぬなりかん
の君やう〳〵ひきいりつゝむつかしとおほしたれ
は心うき御けしきかなあやまちすましき心のほ
とはをのつから御らんししるやうも侍らん物をとてかゝ
るつゐてにいますこしもらさまほしけれとあや
しくなやましくなんとていりはて給ぬれはいと
いたくうちなきてたち給ぬ中〳〵にもうち出てける
かなとくちおしきにつけてもかのいますこし身に
しみておほえし御けはひをかはかりの物こしにて

6オ

も御声をたにいかならんつゐてにきかんとやすから
す思ひつゝおまへにまいり給へれは出給て御かへり

なときこえ給ふこの宮つかへをしふけにこそ思ひ
給へれ宮なとのれんし給へる人にていと心ふかき
あはれをつくいひなやまし給に心やしみ給らん
と思になん心くるしきされとおほはら野の行幸
にうへをみたてまつりてはいとめてたくおはしけり
思給へりきわかき人はほのかにも見たてまつり
てえしも宮つかへのすちもてはなれしさおもひ
てなんこの事もかく物せしなとの給へはさても

6ウ

人さまはいつかたにつけてかはたくひて物し給ふら
ん中宮かくならひなきすちにておはしまし又こ
き殿やむことなくおほえことにて物し給へはい
みしき御思ひありともたちならひ給事かたく
こそ侍らめ宮はいとねんころにおほしたなるをわ
さとさるすちの御宮つかへにもあらぬ物からひきた
かへたらんさまに御心をき給はんもさる御なからひに
てはいとおしくなんきゝ給ふるとおとなおとなし
く申給かたしやわか心ひとつなる人のうへにもあら

ぬを大将さへ我をこそうらむなれすへてかゝる事の

7オ

心くるしさを見すくさてあやなき人のうらみおふ
かへりてはかるかるしきわさなりけりかのはゝ君
のあはれにいひをきし事のわすれさりしかは心
ほそき山里になんときゝしをかのおとゝはたきゝ
いれ給へくもあらすとうれへしにいとおしくてかく
わたしそめたるなりこゝにかく物めかすとてかのおと
とも人めかい給なめりとつき〳〵しうの給なす
人からは宮の御人にていとよかるへしいまめかしうい
となまめきたるさましてさすかにかしこくあや
まちすましくなとしてあはひはめやすからん

7ウ

さて又宮つかへにもいとよくたらひたらむかし
かたちよくらう〳〵しき物のおほやけことな
とにもおほめかしからすはか〳〵しうてうへのつねに
ねかはせ給ふ御心にはたかふましなとの給けしき
のみまほしけれは年比かくてはくゝみきこ

え給ける御心さしをひかさまにこそ人は申な
れかのおとゝもさやうになんおもむけて大将の
あなたさまのたよりにけしきはみたりける
にもいらへ給けるときこえ給へるうちわらひて
かた〳〵いとにけなき事かな猶宮つかへをも何

8オ

事をも御心ゆるしてかくなんとおほされんさ
まにそしたかふへき女は三にしたかふ物にこそあ
なれとつゐてをたかへてをのか心にまかせん事は
あるましき事なりとの給ふうち〳〵にもやむ
事なきこれかれ年比をへて物し給へはえその
すちの人かすには物し給はてすてかてらにかくゆ
つりつけおほそふの宮つかへのすちにらうろふ
せんとおほしをきつるいとかしこくかとある事也
となんよろこひ申されけるとたしかに人のかた
り申侍しなりといとうるはしきさまにかたり

8ウ

申給へはけにさはおもふ給ふらんかしとおほす

にいとをしくていとまか〳〵しきすちにも思より
給けるかないたりふかき御心ならひならんかしいま
をのつからいつかたにつけてもあらはなる事あり
なんおもひくまなしやとわらひたまふ御けし
きはけさやかなれと猶うたかひはをかるおとと
さりやかく人のをしはかるあんにおつる事もあら
ましかはいとくちおしくねちけたらましかの
おとゝにいかてかく心きよきさまをしらせたてま
らんとおほすにそけに宮つかへのすちにてけさや

9オ

かなるましくまきれたるおほえをかしこくも思
ひより給けるかなとむくつけうおほさるかくて御
ふくなとぬき給ふて月たゝは猶まいり給はんこ
といみあるへし十月はかりにとおほしの給をうち
にも心もとなくきこしめしきこえ給人〳〵は
たれも〳〵いとくちおしくてこの御まいりのさき
にと心よせのよすか〳〵にせめわひ給へとよし
野のたきをせかんよりもかたき事なれは

いとわりなしとをの〳〵いらふ中将も中〳〵なる
事をうち出ていかにおほすらんとくるしきまゝに

9ウ

かけりありきていとねんころに大かたの御うしろみを
おもひあつかひたるさまにてついせうしありき給
ふたはやすくかろらかにうち出てはきこえかゝり給
はすめやすくもてしつめ給へりまことの御はら
からの君たちはえよりこす宮つかへのほとの御
うしろみをとをの〳〵心もとなくそ思ける頭中将
心をつくしわひし事はかきたえにたるをうち
つけなる御心かなと人〳〵はをかしかるにとのゝ御
つかひにておはしたりなをもて出すしのひや
かに御せうそこなともきこえかはし給けれは

10オ

月のあかき夜かつらのかけにかくれて物し給へり
みきゝいるへくもあらさりしをなこりなくみなみ
のみすのまへにすへたてまつるみつからきこえ給
はん事はしも猶つゝましけれは宰相の君して

いらへ聞え給ふなにかしをえらひてたてまつり
給へるは人つてならぬ御せうそこにこそ侍らめかく物
とをくてはいかゝきこえさすへからむみつからこそかす
にも侍らねとたえぬたとひもはへなるはいかにそ
やこたいの事なれとたのもしくそ思給ける
とて物しと思給へりけに年比のつもりもと

10ウ

りそへてきこえまほしけれと日比なやましく
侍れはおきあかりなともえし侍らてなんかく
まてとかめ給も中〳〵うと〳〵しき心ちなんし侍
けるといとまめたちてきこえいたし給へりなや
ましくおほさるらんみき丁のもとをはゆるさせ給ま
しくやよし〳〵けにきこえさするもこゝちなかりけり
とておとゝの御せうそこともしのひやかにきこえ
給ふよういなと人にはおとり給はすいとめやすし
まいりたまはんほとのあないくはしきさまも
えきかぬをうち〳〵にの給はんなんよからん何事

11オ

も人めにはゝかりてえまいりこすきこえぬことを
なん中〳〵いふせくおほしたるなとかたり聞え
給ふつゐてにいてやおこかましき事もえす
きこえさせぬやいつかたにつけてもあはれを
は御覧しすくすへくやはありけるといよ〳〵う
らめしさもそひ侍るかなまつはこよひなとの
御もてなしよきたおもてたつかたにめしいれ
てきんたちこそめさましくもおほさめしも
つかへなとやうの人〳〵とたにうちかたらはゝやま
たかゝるやうはあらしかしさま〳〵にめつらし

き世なりかしとうちかたふきつゝうらみつゝけたる
もをかしけれはかくなんと聞ゆけに人きゝを
うちつけなるやうにやとはゝかり侍るほとにとし
ころのむもれいたさをもあきらめ侍らぬはいと
中〳〵なる事おほくなんとたゝすくよかにきこえな
し給にまはゆくてよろつをしこめたり
いもせ山ふかき道をはたつねすてをた

11ウ

えのはしにふみまとひけるよとうらむるも人
やりならす
まとひけるみちをはしらていもせ山たと〳〵
しくそ誰もふみ見しいつかたのゆへとなんえ
おほしわかさめりし何事もわりなきまておほ
かたの世をはゝからせ給めれはえきこえさせ給
はぬになんをのつからかくのみも侍らしときこゆる
もさる事なれはよしなかゐし侍らむもすさ
ましきほとなりやう〳〵らうつもりてこそはかく
こんをもとてたち給月くまなくさしあかりて
空のけしきもえんなるにいとあてやかにきよ
けなるかたちして御なをしのすかた花やかにて
いとをかし宰相の中将のけはひありさまには

12オ

えならひ給はねとこれもおかしかめるはいかて
かゝる御ならひなりけんとわかき人〳〵はれいのさる
ましき事をもとりたてゝめてあへり大将はこ

12ウ

の中将はおなし右のすけなれはつねによひと
りつゝねんころにかたらひおとゝにも申させ給け
り人からもいとよくおほやけの御うしろ見となる
へかめるしたかたなるをなとかはあらんとおほしなから
かのおとゝのかくしたまへる事をいかゝはきこえ返す
へからむさるやうある事にこそと心え給へるすち
さへあれはまかせきこえ給へりこの大将は東宮
の女御の御はらからにそおはしけるおとゝたちをゝ
き奉りてさしつきの御おほえいとやんことなき
君なり年三十二三のほとに物し給ふ北のかた
はむらさきのうへの御あねそかし式部卿の宮
の御おほい君よ年のほとみつよつかこのかみは
ことなるかたはにもあらぬを人からやいかゝおはし
けんおうなとつけて心にもいれすいかてそむき
なんとおもへりそのすちにより六条のおとゝは大将
の御事はにけなくいとおしからむとおほしたる
なりけり色めかしくうちみたれたるところな

13オ

13ウ

きさまなからいみしくそ心をつくしありき給
けるかのおとゝもてはなれてもおほしたゝさなり
女はみやつかへを物うけにおほいたなりなとうち〳〵
の事もさるくはしきたよりしあれはもりきゝ
てたゝおほとのの御おもむけのことなるにこそは
あなれまことのおやの御心たにたかはすはとこ
の弁のおもとにもせめ給九月にもなりぬはつ
霜むすほゝれえんなるあしたのれいのとり〳〵
なる御うしろみとものひきそはみつゝもてまいる
御ふみともを見給ふ事もなくてよみきこゆる

14オ

はかりをきゝ給大将とのゝにはなをたのみこしもす
きゆく空のけしきこそ心つくしに
　かすならはいとひやせましなか月に命を
かくるほとそはかなき月たゝはとある御さためを
いとよくきゝ給なめり兵部卿の宮はいふかひな
き世はきこえんかたなきを

　あさ日さすひかりをみても玉さゝの葉わけ
の霜をけたすもあらなんおほしたにしらはな
くさむ方もありぬへくなんとていとかしけたるし
たおれの霜もおとさすもてまいれる御つかひ

14ウ

さへそうちあひたるやしきふきやうの宮の左兵衛
督はとのゝうへの御はらからそかししたしくまいりな
とし給君なれはをのつからいとよくものゝあないも
きゝていみしくそ思ひわひけるいとおほくうらみつゝけて
　わすれなんと思ふも物のかなしきをいかさま
にしていかさまにせんかみの色すみつきしめたるに
ほひもさま〳〵なるを人〳〵もみなおほしたえぬへか
めるこそさう〳〵しけれなといふ宮の御かへりをそ
いかゝおほすらんたゝいさゝかにて
　心もてひかりにむかふあふひたに朝をく霜

15オ

ををのれやはけつとほのかなるをいとめつらしと
み給にみつからはあはれをしりぬへき御けし

きにかけ給へれは露はかりなれといとうれしかり
けりかやうになにとなけれとさま〳〵なる人〳〵の
御わひこともおほかりをんなの御心はへはこの君
をなんほんにすへきとおとゝたちさためき
こえたまひけりとや

15
ウ

注

(1)「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録　源氏物語秘訣」『文学部紀要』第四七巻二号（中京大学文学部　平成二五年三月）

(2)「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆　桐壺」『文学部紀要』第四八巻一号（中京大学文学部　平成二五年一〇月）

(3)「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆　帚木」『文学部紀要』第四八巻二号（中京大学文学部　平成二六年三月）

(4)「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　蓬生　手習　玄陳筆　関屋」『文学部紀要』第五一巻二号（中京大学文学部　平成二九年三月）

(5)「長谷川端蔵『源氏物語』玄的筆　空蝉　岡本主水筆　夕顔」『文学部紀要』第四九巻一号（中京大学文学部　平成二六年一〇月）

(6) 注5に同じ。

(7)「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　若紫　石井了倶筆　末摘花　左馬助筆　花宴」『文学部紀要』第四九巻二号（中京大学文学部　平成二七年三月）

(8)「長谷川端蔵『源氏物語』東寺観智院筆　葵　岡本主水筆　賢木　北左平次行生筆　花散里」『文学部紀要』第五〇巻一号（中京大学文学部　平成二七年一〇月）

(9)「長谷川端蔵『源氏物語』大鳥居信岩筆　須磨　岡本主水筆　明石　澪標」『文学部紀要』第五〇巻二号（中京大学文学部　平成二八年三月）

(10) 注9に同じ。

(11) 注4に同じ。

(12)「長谷川端蔵『源氏物語』宗琢筆　絵合　玄仍息女筆　松風　岡本主水筆　薄雲　伴与九郎紀金筆　朝顔」『文学部紀要』第五二巻一号（中京大学文学部　平成二九年一一月）

(13)「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　少女　玉鬘　昌倪筆　初音　八幡田中殿筆　胡蝶」『文学部紀要』第五二巻二号（中京大学文学部　平成三〇年三月）
(14) 注13に同じ。
(15)「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　橋姫」『文学部紀要』第五一巻一号（中京大学文学部　平成二八年一二月）
(16) 注4に同じ。
(17) 注7に同じ。
(18)「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆　紅葉賀」『文学部紀要』第四六巻二号（中京大学文学部　平成二四年三月）
(19)「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆　宿木」『文学部紀要』第四七巻一号（中京大学文学部　平成二四年一〇月）
(20) 注7に同じ。
(21) 注8に同じ。
(22) 注8に同じ。
(23) 注9に同じ。
(24) 注12に同じ。
(25) 注12に同じ。
(26) 注12に同じ。
(27) 注13に同じ。
(28) 注13に同じ。
(29) 上野英子氏「紹巴所持本狭衣物語と『下紐』をめぐる考察―巻一を中心に―」『論叢狭衣物語一　本文と表現』（新典社平成一二年）
(30) 川崎佐知子氏「里村紹巴と奈良連歌『狭衣物語』享受史研究の一助として」『待兼山論叢』文学篇三四（平成一二年）。

その注には、実践女子大学図書館山岸文庫蔵『狭衣下紐』（神宮文庫蔵『狭衣下紐』の山岸徳平氏新写本）に、山岸徳平氏は、宗具を江村専斎とする考証も載せる。

（31）木藤才蔵氏『連歌史論考』下（明治書院　平成五年五月）「第十一章　室町後期の地方連歌」。

（32）『続群書類従』第三一下（続群書類従完成会　大正一五年一二月）

（33）正宗敦夫氏編『顕伝明名録』下　日本古典全集（日本古典全集刊行会　昭和一三年一二月）

（34）正宗敦夫氏編『顕伝明名録』上　日本古典全集（日本古典全集刊行会　昭和一三年一一月）の最初に「朱書符」として、「（波）は新撰菟玖波集」とある。

（35）宗政五十緒氏校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』東洋文庫二〇二（平凡社　昭和四七年一月）

森銑三氏校注『近世畸人伝』岩波文庫（岩波書店　昭和一五年一月）

（36）寺田貞次氏『京都名家墳墓録』（山本文華堂　大正一一年一〇月）

（37）『史籍集覧　老人雑話』（近藤活版所　明治一四年一〇月）。『翁草』巻六一「老人雑話抜萃」日本随筆大成（第三期）二〇（吉川弘文館　昭和五三年四月）も参考。

（38）連歌総目録編纂会編『連歌総目録』（明治書院　平成九年四月）

（39）加藤楸邨氏他監修『俳文学大辞典』（角川書店　平成七年一〇月）「祐範」

（40）注29に同じ。

（41）注18の解題で触れた。

（42）『八代城主・加藤正方の遺産』（八代市立博物館未来の森ミュージアム　平成二四年一〇月）を参考。

（43）鈴木棠三氏『安楽庵策伝ノート』（東京堂出版　昭和四八年九月）

（44）中村幸彦氏編著『策伝和尚送答控』未刊文芸資料第三期（古典文庫　昭和二九年一月）に記載があり、注13の「解題」で触れた。

(45) 清水孝之氏他校注『とはじぐさ』「切字てふ事助語の事　并能順芭蕉の対話」『中興俳論俳文集』古典俳文学大系一四（集英社　昭和四六年七月）

(46) 棚町知彌氏「加能連歌壇史藁草・その二（後）―能順伝資料その十―」『国文学研究資料館紀要』一五　平成元年三月）

(47) 大河寥々氏『加能俳諧史』（金沢文化協会　昭和一三年二月）

(48) 奥野高広氏他校注『信長公記』角川文庫（角川書店　昭和四四年一一月）

(49) 黒板勝美氏『公卿補任』第三篇（大八洲出版株式会社　昭和一一年八月）「中院家」「北畠家」。

(50) 宝月圭吾氏他監修『系図纂要』第九冊（名著出版　昭和四九年二月）「中院家」「北畠家」。

(51) 注42の中に葵の外箱の写真がある。

(52) 注49に同じ。

(53) 宝月圭吾氏他監修『系図纂要』第六冊（名著出版　昭和四八年一一月）「水無瀬家」。

(54) 注46の論文に、次のような手紙がある。

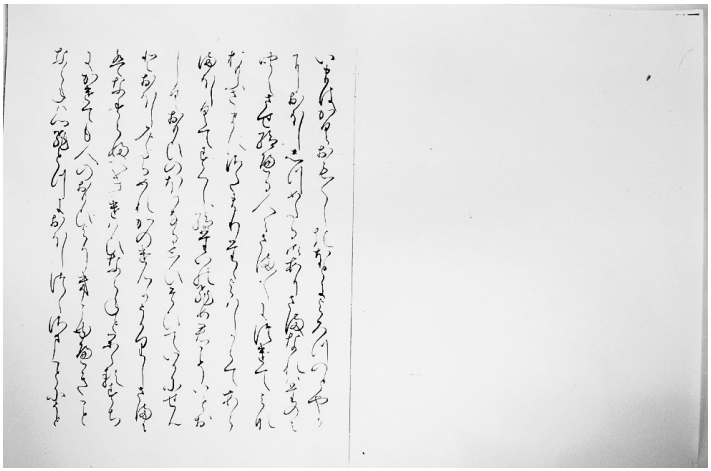
手前病人為御見舞、飛脚被差越、殊御祈念御札守并団二本送賜、喜悦之至候、猶追而可被申候、恐々謹言。

（元和八年）六月廿九日　　松筑前利光（花押）

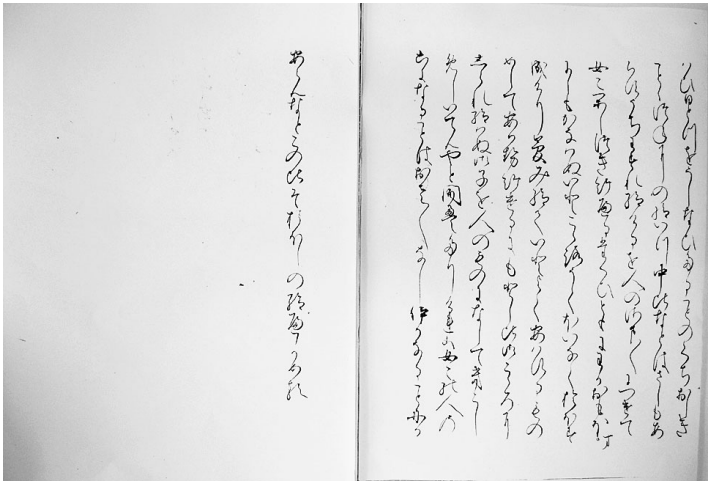
北野　能舜　返報

(55) 『石川県史』第三編（昭和四年一二月）。その中に「前田利常と連歌、又元和八年藩侯前田利常以下の詠じたる連歌一巻あり。その發句に御上とあるは將軍秀忠にして、この連歌を興行したる六月十七日は、秀忠の女にして後水尾天皇の女御たりし和子が深曾木の祝を擧げたる翌日なるが故に、亦之を賀するの意に出でたるやも知るべからず。この連歌に利光とあるは利常の當時の名とし、その脇句をつける龜鶴は利光の長女にして時に十歳、犬千代は光高にして八歳、千勝は後の富山藩祖にして六歳、宮松は大聖寺藩祖となれるものにして五歳なるが故に、是等の句は皆代詠たりしなり。」という詳しい解説がある。

① 蛍　表紙

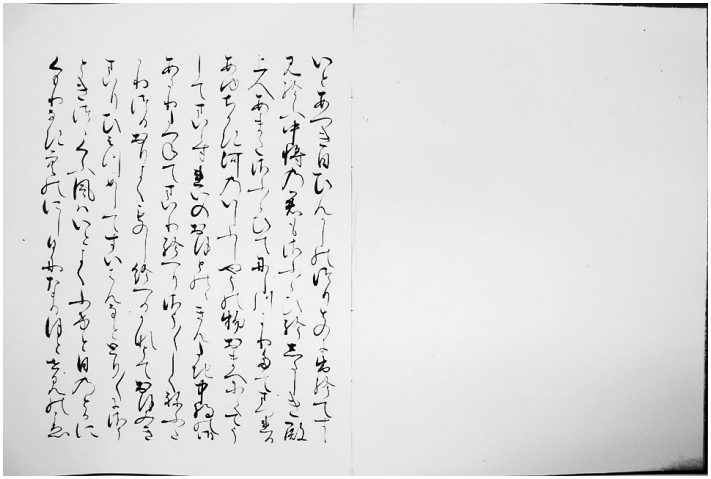


② 蛍　１オ

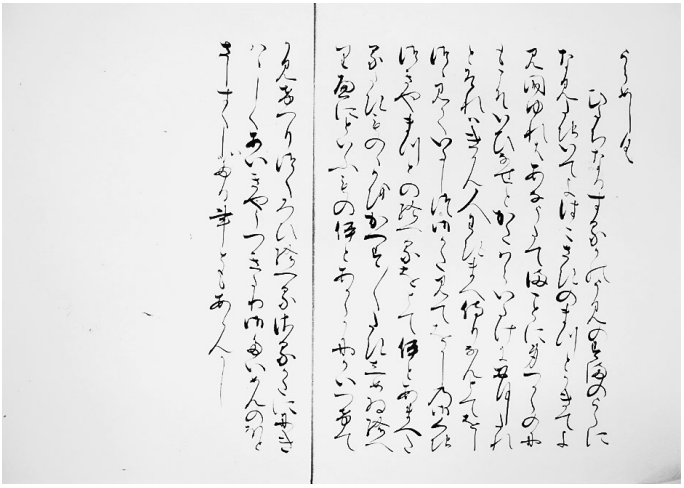


③　蛍　終丁

④　常夏　表紙

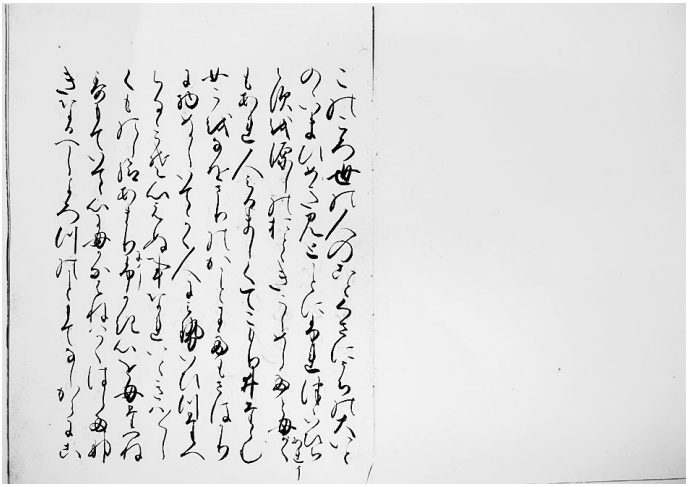


⑤　常夏　１オ

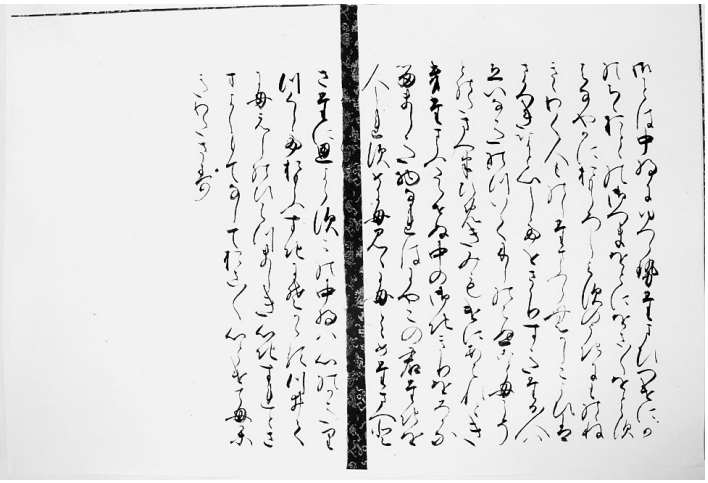


⑥　常夏　終丁

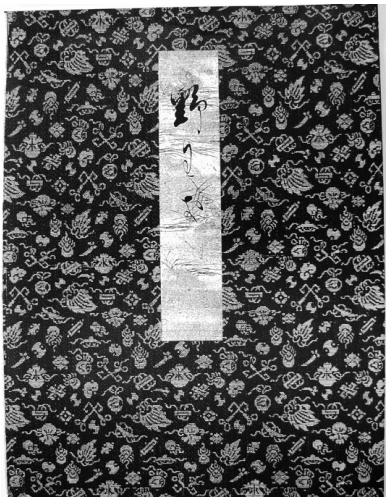
⑦　篝火　表紙



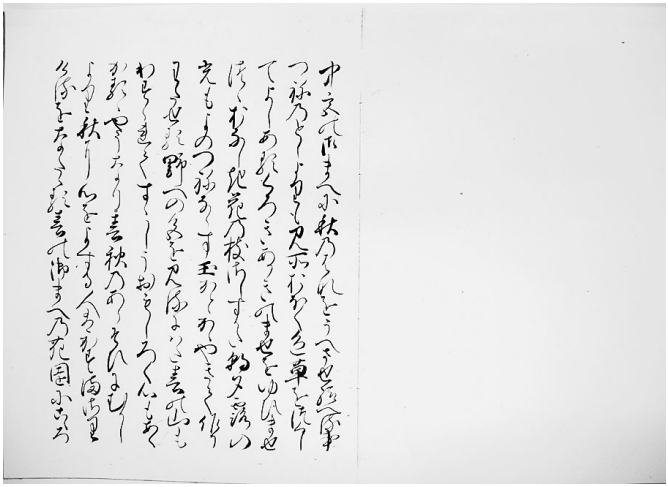
⑧　篝火　１オ



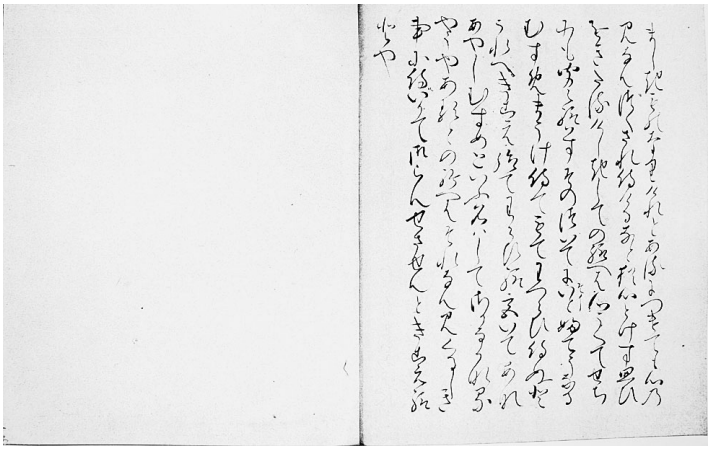
⑨　篝火　終丁



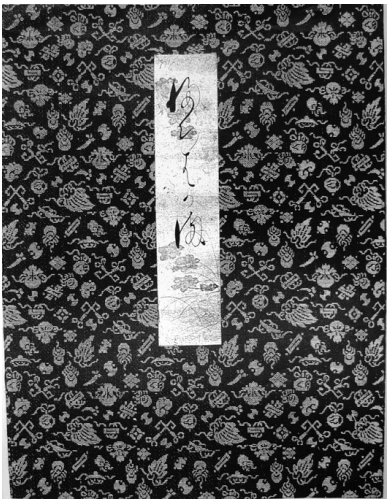
⑩　野分　表紙



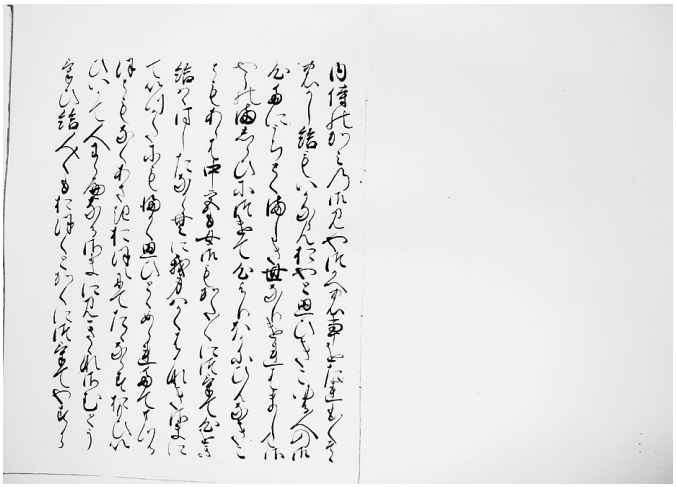
⑪　野分　１オ



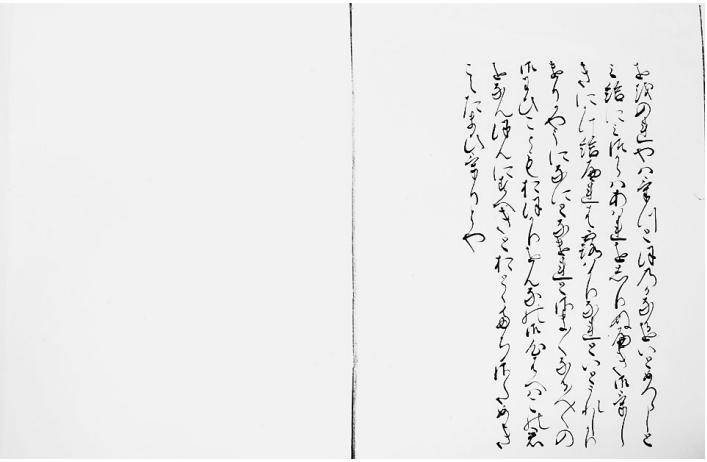
⑫　野分　終丁



⑬　藤袴　表紙



⑭　藤袴　１オ



⑮　藤袴　終丁